これからの世界・社会に立ち向かう
日本の夢（ビジョン）

第一期自啓共創塾

塾生・最終レポート

附・伴走者レポート

令和 3 年 12 月 21 日

一般社団法人

世界のための日本のこころセンター

塾生の最終レポート　「これからの世界・社会に立ち向かう日本の夢（ビジョン）」

原則 15 歳から 50 歳までの多世代で、また職業や属性も多岐にわたり、さらに居住場所も日本全国、海外に及ぶ 52 名の塾生が集い、学び合った結果の、各人の最終レポートです。

	性別	年齢	所属	役職
1	男	52	企業	共同創業者
2	男	51	一般社団法人	代表理事
3	男	48	企業	執行役員
4	男	48	私立高等学校	教諭
5	女	19	大学生	政治学科　1年生
6	男	57	企業	取締役　主幹研究員
7	女	39	一般社団法人	理事
8	男	32	企業（Vietnam）Co., Ltd.	Director
9	女	41	企業	内部監査部　副参事
10	男	19	大学生	
11	男	44	企業	地方創生推進部・担当部長
12	男	57	私立中学高等学校	中学教頭補佐・社会科
13	女	39	企業	営業企画部　リーダー
14	女	46	法律事務所	弁護士
15	女	35	医療センター	医師
16	女	47	市役所	区役所総務課長
17	女	37	企業	
18	男	63	私立中学校高等学校	副校長
19	男	51	企業	部長
20	男	45	企業	ディレクター
21	男	47	企業	
22	男	35	政府機関	職員
23	男	43	企業	代表取締役社長
24	男	32	私立高等学校	法人事務局次長/学校企画部長
25	男	36	企業	カスタマーサクセス
26	男	56	大学	千葉事務部　部長
27	男	45	企業	東京支社システム開発部ゼネラルマネージャー
28	男	42	企業	代表取締役
29	男	49	企業	代表取締役
30	女	49	企業	ビジネスプロデューサー
31	男	38	企業	
32	女	43	企業	課長
33	男	43	企業	課長
34	男	37	企業	取締役
35	女	29	企業(ストックホルム)	
36	男	40	一般社団法人	参事
37	男	44	企業	戦略グループ主査
38	女	51	企業	課長
39	女	26	企業	課長
40	男	51	企業	事業グループ　グループ長
41	男	39	県庁	知事推薦
42	男	58	企業	本部長
43	男	43	中央官庁	係長
44	男	15	高校生	
45	男	19	大学生	環境情報学部２年
46	女	17	高校生	３年
47	女	17	高校生	３年
48	女	18	大学生	１年
49	女	17	高校生	３年
50	男	41	県庁東京事務所	政策課長
51	男	39	県庁東京事務所	政策課長（文教）
52	男	46	企業（インドネシア在住）	社長

1．横山真也　　「食を通じて伝える日本のこころ」

今時代が求めているのはサステナブルな世界である。行き過ぎた資本主義はマネー至上主義の下に環境破壊や経済格差を深刻化させ、地球の限界を明らかにした。そこに新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大が追い打ちをかけ、いよいよ世界はサステナブルをいかに実現させるかの議論で百家争鳴の状況にある。先月開催された COP26（国連気候変動枠組条約第 26 回締約国会議）でも予定していた会期を延長しても合意内容がまとまらなかったという事実が、その深刻さを象徴している。

こうした混沌とした時代に求められるのはリーダーではなく調整役ではないだろうか。各国の意見を聞き、高い視座から利害を調整し、お互いが歩み寄ることで未来へと続くサステナブルを実現できると説くのである。これはまさに日本のこころである『和をもって尊しとなす』であり、日本人だからこそ担える重責であると考える。

日本は古来自然と共生することで持続してきた国である。そして日本は単一政体の国家としては世界最古の国であると知られている。自然を崇めこれまで綿々とその歴史と伝統を紡いできたサステナブルな国なのである。サステナブルであり続けている理由は何か、どう生き抜いてきたか、今まさに世界は日本のこころを求めていると言えよう。

そこで私は食を通じて世界に貢献することにした。日本に古くから伝わるうまみを引き出す技術を用い、世界中の野菜をおいしくさせるのである。地球の喫緊の課題は温暖化の進行を防ぐことで、中でも畜産業の温室効果ガスの排出量は全体の 18%（2020 年）と大きい。これを菜食へ切り替えることで世界のどこででも地産地消が促進され、フードマイレージ、つまり食料を輸送するために排出される温室効果ガスをも削減することができる。

実は本塾に入塾中にこの考えに至り、すでに食品製造事業を興した。そして今月第一弾商品として植物性 100%のタマゴを開発しテスト販売を開始した。これはベジタリアン（菜食主義者）やヴィーガン（動物性を摂らない）だけではなく、近年増加し続けている食物アレルギーをもつ子どもたち（乳児では約 10%に至る）にも喜ばれている。またドイツの団体が主宰する食品新興企業育成プログラムに日本企業として初めて選抜され、欧州でも大きく注目されている。

食を通じて日本のこころを世界へ伝える。私は自社の植物性食品を届けることで、「誰一人取り残さない」SDGs の観点も含め「和のこころ」を世界へ伝えてゆきたい。

2．鈴木秀顕　　「これからの世界・社会に立ち向かう日本の夢（ビジョン）」

経済一流、と呼ばれていた日本経済は、2010 年に名目 GDP が中国に抜かれてから一気に後退したと見ている。それから約 10 年経つ現代日本も巻き返しの傾向は見られることなく、反対に後退の速度はさらに進んでいるような気さえする。それは、敗戦後の金融資本主義のグローバル経済に傾倒し、欧米で進められていた大量生産大量消費型の社会に変容していった結果、あたらしいものやことがいいもので、古いものは悪いことという風潮が形成されていったことが多いに関係しているような気がしている。欧米のマーケティングが功を奏した形になっていったのだろうが、日本は、人の根底にある考え方まで変容させることによって、欧米の市場として形成されていったのである。それは、たとえば江戸時代を鎖国や士農工商といったことを外形上の悪いこととしてあげつらえ、それまでの日本の中に培われてきた本質的な平和な世界から、本質的な社会構造としては競争や戦争といった世界への誘いであったにも関わらず、教育やメディアを最大限活用することによって欧米の市場として構築されていくことになったのである。結果として、日本ではバブル経済を状態形成するほ

どお金があることはいいことであるという強い思いを形成し、かつどっぷりと日本人を金融資本主義の世界に浸からせることとなったのである。そこから産まれてきた現代日本人像は、まじめで丁寧、空気を読むという他から指摘された日本人像を受け入れ、まるでロボットがごとく文句も言わず死ぬまで仕事をし、お金持ちになることがよいことという憧れの世界像を醸成することになり、さらには欧米が裕福となるための市場として動かされることとなっていったのである。

しかし、その代償は大きかった。本来、人が生きていく上で大切なことは、平和な世界の中で幸福度が高い状態を作りつつ人生を全うすることのはずであり、そのために日本人は日本人特有の文化やこころを作ってきていた。そしてそれは、戦った上で勝ち取るものではなく、多種多様な人が協力しながら得ていくものであったのである。太古の昔より幸せな社会の中では、均一な人が求められるわけではなく、多様な人が共存する社会が形成されてきたのである。テキストの中で取り上げられた偉人の人たちは、現代人では変人と呼ばれそうな人であるが、どこか現代に使用される変人とは違う価値観で称えられてきたのである。そのような多様な人が存在していたからこそ、豊かな文化が生まれ、楽しい社会が形成されてきたという気付きを得た。新しいものを求めるのではなく、リソース（資源）を大切にし、当然の存在としてもったいないがある文化を形成してきたのである。現代日本ではこのもったいないをケチで片付けられることも多く見受けられるようになってきてしまった。それはまさに、欧米型の金融資本主義が身に沁みついてしまったからなのであろう。「もったいない」のこころはお金で勘定できるものではない。現代日本はすべてをお金で勘定されるようになってきてしまったのである。（ただし、GDP で換算されないものは金勘定から外される。）

この状態から脱却し、人間本来の生きる意味を持った生き方を高めていくためには、今まで良しとされてきた欧米型の金融資本主義の形ではなく、日本のこころをもった生き方や働き方をよしとするように考えることができる教育からやり直していかなければいけないのだろうと思っている。そのために地域リーダー育成スクール「ESD ユニバーシティ」を各地に立ち上げるべく活動をしている。特徴としては、起業やイノベーションを軸とした座学のほか、OECD の教育カリキュラムでも認められた地域社会と深く関わりながら、PBL 教育としての地域社会の課題解決を考えるディベートやそのディベートから生まれた活動を同時に進めていることである。地域課題解決をするための方策を考えるときには日本のこころが必要となり、日本のこころに自ら気付けるようなプログラムになるようになっている。それを日本全国の各地に展開しようと活動している。全国展開方法としては、2 種類用意し、ひとつは独自の学校形態である ESD ユニバーシティと、もうひとつはオリジナルのカリキュラムを既存学校の中に組み入れて展開する ESDU 認定学校という両方の形からの展開である。これら教育を継続的に展開していくことにより、グローバル社会の中にあっても他国や他人に依存することなく動いていくことができる自立した日本や日本人になってほしいと思っている。

3. 金子　吉寿

私がこれからの世界・社会に立ち向かう日本の夢・ビジョンは、世界中の人々が生命を輝かせ可能性を拓いて創造性にあふれた出会いを通じて縁と絆を育み創り出し続けることに貢献することです。自分自身と周りの人々、両者を含む世界がうまくいくこと、誰にとってもうまくいく世界を創り出すことです。世界のビジョン実現を誠実にサポートします。

私は、これまでの自啓共創塾で、和の文化・日本文化のこころ、縄文時代から連綿とつながる日本の源流を見てきました。現在は、職場が人工知能や機械に代替され産業構造に大きな変化が起きています。社会構造の変化はあっても人間の心は生命現象であり機械学習では乗り越えることができないものがあるとの考えが一般

化しつつあります 。
私自身が、本塾の学びを通じて受け取った興味や関心から実践していく世界のための「日本のこころ」とは、主に次の①～⑥です。
① おかげさま、おたがいさま、もったいないの精神
“おかげさま”の“おかげ”は神仏の加護のという意味。他力によりうまくいったことを感謝する言動を発していきます。
“おたがいさま”一見違って見える両者とも実はよく見ると同じような状態におかれている、また、同じような事をし合っている。相手との共通のつながりを感じていくこと。
“もったいない”とは神仏・貴人などに対して不都合、不届きであること、物事を無駄にせず活かしていく。物の本質を大切にしていく、この世に何一つとして独立して存在しているものはないという「空」(くう)、「物事はすべて繋がって存在している」という「縁起」(えんぎ) の思想、当たり前ではなく有難く、私たちは「生かされている」という真実を意識し生きていきます。
② 和の精神
和の精神は、たんに仲良くするということではありません。自分を押し殺して相手に合わせるということではありません。本来「和」とは、それぞれが独自に存在し力を発揮し、かつ調和がとれていることです。創造力の源となります。
③ 自然との調和
目の前の事象、対象のみに注目するだけではなく、その背景にも目を向け、すべての事象、現象は背景の万物とつながって存在している。宇宙、地球、人類の時空から将来の世界を見据え「いま、ここ」からビジョンに向けて自然と調和し永続的、持続可能な生活、社会を創り出し暮らすこと、世界が力をあわせて農業、林業、建築、教育や文化、健康、経済、地域社会のあり方を探究しエネルギー消費の過度な社会からエネルギー消費を最適化し少ない社会を創り出す社会と個人の課題に取り組み。どのように自然の豊かさを暮らしに取り入れていくか実践します。
④ 十方よしの全球経営哲学
私は和菓子屋営む家系に生まれました。祖父が話してくれた近江商人の商道に、「三方よし」があります。売り手よし、買い手よし、世間よしと三方すべてが喜ぶ商売をせよとの教えです。私はこれを「十方」に置きかえました。仏教でいう「十方世界」「敵をつくらず、味方をふやす」こと、本当に相手のことを考え、現世代だけではなく次世代以降も含めた喜び幸せの「十方よし」を探究します。
⑤ 金継ぎ
金継ぎは、欠けた器を生まれ変わらせる日本的な技術です。陶磁器の破損部分を漆によって接着し、金属粉で装飾して仕上げる修復技法。金継ぎの技術哲学のように世界の再生に貢献していきます。
⑥ 合気道
私は幼少から合氣道やっていました。合氣道は、武術でありながら、武力によって勝ち負けを争うことを否定し、合氣道の技を通して敵との対立を解消し「敵」という概念を無くしてしまいます。自然宇宙との「和合」「万有愛護」を実現するような境地に至ることを理想として「和の武道」「争わない武道」「愛の武道」「動く禅」とも評されています。また合理的な体の運用により体格体力によらず相手を制する点が特徴です。技の稽古を通して心身を練成し、自然との調和、世界平和への貢献を目指しています。
私自身のこれから取り組みとしては、世界と共に全球経営哲学を生活や事業を通じて拡げていく実践コミュニ

ティを創ります。全球経営哲学のベースとなるあり方は次の通りです。
・世界を球体として（地球）としてメタ（高次元レベル）認知する思考法を実践する。
・世界の空間軸、宇宙、地球、人類の時間軸の中で自分自身の位置を理解する。
・自分自身と、地域、日本、世界の動き、様々な価値観を連動したものとして関わる。
・十方よしを、実践し自分、他者、両者を含む世界を大事にする。
・宇宙視点で人類全体の時空間を正視し、地球ビジョンからバックトラックで行動する。
・地球を経営する世界倫理と経済原理を確立しグランディングする。
・宇宙的視点から高次の課題解決を行う。
上記を統合知、統合能力、統合した生き方として実践し「日本のこころ」を体現したリーダーの出現を創り出します。企業や学校の人財育成システムを見直し、世界から評価される「日本型リベラルアーツ」を通じて「日本のこころ」に覚醒し世界で「日本のこころ」を実践していきます。

4. 松浦　隆　　「これからの世界・社会に立ち向かう日本の夢」

本塾で「日本のこころ」を学んできて、現段階では特に以下の点がその神髄ではないかと感じている。①神仏需の習合といった貪欲かつ器用に異文化を自分たちの環境や生活様式に合わせて取り入れていく逞しさ、②八百万の神といった概念に代表される自然崇拝から派生する、人と自然の対等な関係性による共生・共存の知恵、③（武士）道や禅の精神世界を基にした道徳文化、単なる工業製品ではないモノつくりに魂を吹き込む感性、④長らく植民地支配に苦しんだアジアにおいて欧米列強の植民地化を免れて、日露戦争での勝利でアジアの希望となった点、また太平洋戦争での敗戦からの経済大国となるまでの復興といった教訓に富んだ歴史を有している点、である。これらの特色から、日本だからこそできる貢献とは何かを論じていく。
日本のこころを生かして、これから日本が世界の平和と安定に貢献できることを２つ提案したい。一つは、地球環境の劣化を食い止め、存続し将来の世代へ引き継ぐことである。江戸時代の日本程、今でいう SDGs 的な持続可能な発展を可能にしていた社会はなかったのではないか、という研究もある。日本こそがこれからの時代にその経験値を発揮できる国である。2 つ目は、経済的な格差が広がるにつれて、政治的・イデオロギー的な分断が一層進んでいるこの時代にあって、手を差し伸べ、仲介役を買ってでることで世界中の国々が地球市民として連帯と絆を深められるよう寄与することだ。昔、ユダヤ人を弾圧していたナチスをよそに、日本人はむしろユダ人の賢さに敬意を表し、支援手助けする度量の深さと倫理観があったことからも、日本人が世界の紛争の仲介役を買って出るだけの資質を持っていると信じている。
上記２つの貢献目標を実現するために日本が取れる具体的行動指針は主に３つあると考える。１つは、経済的にもある程度の優位性を保つ努力を継続していくことである。日本円の競争力が弱まり、日本経済および国力が低下している現状は、このまま放置できない課題である。先に掲げたように、日本がリーターシップを発揮して世界に貢献する２つの目標を実現させるためにも、ある程度の経済力が必要である。具体的には、ものつくりを基調としつつも、中間部品だけではなく、世界中を席巻するような最終製品を世界市場に提供している米国アップル社や中国のファーウェイ社のようなビジネスモデルへの転換が不可欠だ。デザイン思考と付加価値を意識し、利益の最大化を図ることが求められる。
次に、日本的な文化ルネッサンスの勃興による世界文化への貢献が考えられる。その昔、平安時代以降から江戸期にかけて世界中に多大な影響を与えた日本の芸術・文化の存在は今でも世界中の識者および芸術家の記

憶に留まっている。葛飾北斎、夏目漱石、丹下哲郎などの作品といった、様々な日本的な文化価値が生まれては世界を魅了してきた。バブル期に経済的に裕福になった日本からは残念ながらそういった文化の発展や発酵はほとんど起こらず、ただ刹那的な快楽に興じて、やがてくるバブル崩壊までの短い春を謳歌したまでだった。そこで、伝統的文化・芸術を再度見直しつつ、現代でも注目を集めている日本的な価値を更に広げて開花させるような国民的な取り組みを国も企業も呼びかけ、支援していくことが理想てきである。空手・合気道・柔道などの武道、マンガ・アニメ文化、茶道や禅の精神性や浮世絵や北斎などの日本画といった価値を教育でも積極的に取り上げ、温故知新の流れを生み、国民の文化度を高めることが理想である。その結果、世界から賞賛され得る国となる。

3つ目として、自分たちの祖先が辿ってきた真実の歴史を知り、自国を愛し、素直に自分たちの歴史を清濁併せ呑む姿勢を持つことが肝要である。日本が貢献し得る世界平和への道は、その前提として自国の文化・歴史に誇りと自信、過ちも併せて認識した上での謙虚さと自戒の念を常に持ち続けるバランス感覚が必要である。特に近現代史に対する国民の知識の圧倒的な勉強不足は戦後の教育の弊害として今も尚、課題であり続けている。先の大戦の戦後処理が 75 年経った今でも、どこか禊を済ませていない感覚を覚えるのは私だけであろうか。ドイツの戦後への反省と継続的な世代を超えた伝承は大いに参考にすべき事案である。平和の定義を誤解したまま日本国民は安穏と米国用心棒の傘の元暮らしてきた。これからは、そういったずるい生き方は通用しないばかりか、自身の魂や誇り、将来の子供たちのアイデンティティー、誇りを奪う悪循環へ直結する。

以上のような国家ビジョンを国のトップが明確な言葉で伝える努力をして欲しい。美しい国を造る、といった概念的で具体的な指針が示されないスローガンではなく、なぜ我々日本人が、そういった使命にリーダーシップを発揮してこれから生きていくべきなのかという明白な理由を示し、「日本のこころ」を皆で再定義して国民の間で共有する機会を積極的に作って行くべきだと考える。

私個人として、上記の様な日本国に近づけるためにもできることは3つあると考える。まず1つ目は、家族・同僚・近所の人々へ今まで以上に関心を持ち、気にかけて愛する努力をすることだ。個人でできなければ、国家・世界レベルでは、そういった呼びかけすら絵空事に終わってしまう。まずは隣人を愛するといった実行を伴う生活習慣の確立が不可欠だ。現在険悪な仲になっている日韓・日中関係だが、個人的な知り合いがおり、その人々との関係がある場合は必ずしもマスコミで報道されているようなお互いをののしり合ったり、すれ違い憎しみ合うといったこともかなり軽減され、相互理解と話し合う素地ができることは自分の経験談や多くの人の体験からも立証されていると感じている。

また、私としては教育を通して日本人の誇りを取り戻すために、歴史、特に近現代史に真正面から向き合うような日本社会になるよう貢献していきたい。12月8日にひっそりと埼玉県入間市にある航空自衛隊の基地に、未だ多数の日本の兵隊のご遺体が埋もれたままの硫黄島からごくわずかであるが遺骨が帰還した。同月 11 日には、同島で日米合同で戦没者への慰霊祭が執り行われたという報道があったが、その報道からは重要度は決して高いとは言えないようなニュースの扱いであったことからも、この国の特に近現代史への軽視が伺える。

そして最後に、大学時代にかじった空手を再開し（または新たに合気道に挑戦）、子どもたちが修練する環境を整えてあげることである。空手、合気道や剣道などの武道には多くの日本的な精神文化と、戦後 GHQ の WGIP による日本精神の撲殺から始まり、現代の画一的な教育で失われつつある身体知が凝縮されている。それらを再度見直すことで、まずは個人レベルから世界をリードするだけの気力と体力、強靭な肉体と精神を育むことこそが、世界を平和へ導くリーターシップを発揮するにふさわしい国民国家の土台になると信じている。

5. 井上　美雨　　これから社会にたち向かう日本のビジョン

私は正直日本のこころが何か正確にはわからない。ただ、日本のこころとは多面的であり、時代の変化に伴って移り変わっていいモノだと思う。でも時折、歴史を振り返って私たちが失っちゃいけないものは何かと考え、意図的に保護することも大切である。では私たちが失ってはいけない日本の心は何であろうか。私は曖昧さと調和の融合であると考える。それは今でも健全だよ、と考える人もいるかもしれない。本当にそうであろうか。現代の私たちがいう曖昧さは、言葉にすることで生じる煩わしさから逃げるための手段で、現代の私たちがいう調和は表面上の取り繕いのことを指していることが多い気がする。だからこそ、今の日本の社会はかつてないほど分断している。曖昧さと調和は最大多数の顔色を伺うためにあるのではない。これらは、本当の意味で多種多様な人が自分と多者（他者）の差異を自覚する必要なく自然体で過ごすために存在するのだと思う。曖昧さは言語化出来ない美しさの存在を認め、差異に執着しない心持ちを可能にする。調和は会議における予定調和な結論を指すのではなく、水面に浮く色素のように自然と混ざり合い、共存しマスターピースを完成させる。現代を生きる日本人はこれを目指さないといけない。たとえば、日本は発達しょうがいとそれを持たない人の差異が明確化されている。差異が明確化されているからこそ、支援学級と普通クラスに分断され、そのふたつがあまりにも極端なのでどちらにも当てはまらず、取り残されてしまう子供たちが存在する。この子たちにあたらしい学校を作って居場所を提供するのは対処療法にすぎず、根本解決にいたらない。根本解決は私たちが発達しょうがいをユニークな個性の一つであると自覚し、日常生活において、差異をラベル付けせず社会にブレンドインできるようサポート体制を確立する事だと考える。発達しょうがいに関わらず、多様なあり方を抵抗無く肯定する社会の成立は、私の定義する曖昧さと調和の融合なしでは考えられない。だから私は日本のビジョンとして曖昧さと調和の融合を提案する。そしてその実現のためには、違いに人々が着目する必要がなくなるようなサポート制度が必要である。私はそのサポート体制を確立するために発達しょうがいと人間の発達について、脳科学と心理学の分野から追及するという以前からの夢を行動に移していきたい。

6. 堀越　勝

問題意識（現代社会の豊かさを支える光と影、２０世紀の価値観の修正）

現在、我々が常識として無意識にみにつけている価値基準は、その時代の背景の中で培われて定着してきたものです。それは歴史的にはヨーロッパの市民革命や近代化から始まり２０世紀にかけて世界に広がりました。日本では明治以降の近代化の中で意識的あるいは無意識的に受け入れられたもので、その本質は物質的豊かさと自由という価値にくくることができると思います。自由という価値は個人を権利主体として尊重する考え方を基本にするため、それを基本にした生き方は個人という存在を重視する生き方につながります。そして、それが集団となったときに結果として個別の価値を優先する個別価値優先志向の自由主義社会を形成することになります。個人の自由が拡大され場合によっては肥大化しました。私は、自由を主体にする価値は一方では人権という意味においてよいと思います。しかし、個人的存在重視の価値観は、自己中心的な思考にもなり、人と人の関係性、より大きな枠組みからという視点を薄れさせる問題が同時に存在すると考えております。

この個別価値優先志向は、地球規模の視野からみると、国家、民族、政治、企業などあらゆる人間の集団に表れています。具体的には、米中の国家問題、ロシアの民族紛争、企業も目先の個別価値（自分の価値）を優先させて、総合的で長期的な視点からの地球規模の問題の解決を放置し先送りしにしてきました。ですが心ある人々の心の奥底では、確かに現代社会は豊かになって自由ではるが、本当にこのままでよいのか、何かもっと大事なことを見失っていないのか、というような疑問が生じてきていたのではないでしょうか。近年、SDG’

s が広がってきているのは、この２０世紀の「物質的豊かさと自由」の偏重した拡大に対する修正の流れが現れてきたのではないかと考えています。

日本のこころはどう貢献できると考えるか

新しい時代には個別価値優先から共存・共創を志向する新しい価値への転換が鍵であり、人類一人ひとりが「どれだけ長いきするか」よりも「どう生きるか」が重要で問題です。その生き方の方向性を決める際に大きなヒントとなり基本になるのが「日本のこころ」です。自啓共創塾で「日本のこころ」を実践知として学び、多様な世代が参加するワークショップの語らいから、自身の空間的な役割認識と時間的な役割認識が醸成されます。空間的な役割認識というのは、自然・社会・文化の創造と発展、サステナビリティの実現のために個人や組織がどのような使命や役割をもち、役立つことができるのか、という認識です。そして、時間的な役割認識とは、現在と未来に対してどのような使命を見いだし、どのような役割を果たすことができるのかという認識です。過去からの価値観や文化を受け継ぎつつ、それらを新しい時代にあわせて進化発展させて引き継ぐ、次世代に残していくという認識です。

自分がこれから、または、将来取り組んでみたいこと

２０世紀の価値観「個別価値志向と自由」の修正をする新しい学びと普及の場である自啓共創塾「日本のこころ」を糧にして、自分自身の展開する経営リーダー育成・教育活動、及び人との対話の中にいかしていきたいと思います。

７．石垣清香

個人の存在や行為そのものが価値のあるものであると認知され、感謝や幸せといったポジティブな感情が循環する社会を目指したい。

経験的で豊かで深く広い、日本のこころを学ぶことで見えてきたのは、現在の個々人の生活における価値観が、仕事と家族（核家族内での結婚、子育て）に集約しすぎていて、それ以外の要素については、意識すら置かれていないのではないか。絞られていることにより、逆に生きづらさに結びつき、こころの豊かさを失っているように感じる。仕事、家族以外の個々人の社会での役割や多様な要素をもう一度評価できるような思考のクリエイティブさが必要であると考えている。すでに新しい働き方や生き方を実践している人は多いが、それでも「働き方」とか「新しい家族像」と言った現在の枠組みの中でのアップデートにすぎない。その人の存在や行為自体が与えるポジティブな要素は他にもあるのである。娘であること、友達であること、自然を感じていること、暇であること、試練に立ち向かっていること、修行していること、趣味を楽しんでいること、それ自体が価値なのにも関わらず、現在の経済的価値に直結しないものは社会の中でまるで評価されない。少なくともそのような気持ちにさせられている。

デンマークでいえば、ヒュッゲという独特の価値観が大切にされるが、より個々人それぞれ特有の価値観がより認められる社会でありたい。日本人が古来、実はほがらかで、おしゃべりな人たちと見られた時代もあったのである。豊かで曖昧で許容範囲の広い日本のこころは、これ、と端的に表せない良さがあるのであり、個々人の存在や行為自体、その中で感じたことが大切にできる社会であるべきだと考える。

私のこれからの挑戦は、評価もしなければ評価もされない、ただ目の前にある行為に没入し、自分の心が満たされ、周りを幸せにできる活動を展開していきたい。

今までの市場原理であえて動かないことが問題提起になるだろうと考える。創造すること自体が資本となり、創造すればするほどその資本が増えていく＝幸せが増えていく、ようなコミュニティを作ろうと考えています。

現実的には、資本主義の中で生活していかなくてはならない。その中で生きなくてはならない時間を減らしてみること。そのようなコミュニティに属してみること、創造してみることで、変化を起こしていきたい。

8. 尾崎　士朗　　「国語力 ーアイデンティティ復興への出発点ー」

本塾に加入した背景は、「日本人のアイデンティティ」について噛み砕いて説明できない自分への歯がゆさであった。

私は、幼少期はずっと日本で暮らし、小学校高学年に２年間、父親の海外赴任に伴い英語圏での生活を経験させてもらった。その際有難いことに日本人学校に通わせて頂き、日本で行われているそれとほぼ変わらない初等教育と、入門レベルの現地英語教育を受けることが出来た。中には、現地での生活が日本の生活よりも長くなっている子や、10 歳足らずにして既に英語がペラペラの子（逆に日本語に難あり）など、通常の日本の公立校にはいない様々なバックグラウンドを持つ同級生と多く接することが出来た。その後は日本で中高大社会人と生活し、8 年前に自らの意志でベトナムに飛び立ち、現在に至るまで当地で仕事をしている。図らずも人生の３分の１近くを海外で過ごさせてもらっている計算になる。

「外国で暮らして初めて日本の良さが分かる」や「海外赴任をして初めて異文化を理解できる」という海外生活者に耳障りのいい話は良く耳にする。確かに私も、たまに日本に帰る際に入る風呂・温泉、和食（特に鰻）や四季などの日本独特な文化や自然を感じる瞬間について、以前より敏感に幸せを感じるようになったことは間違いない。しかしながら、実際により強く痛感したのは、イチ日本人として、どれほど自分が自国の歴史や文化に無頓着か、日本人の精神性を知らないか、そしてそれらを語れる言葉を備えていないか、ということである。日本に生まれた日本人として、日本が好きで、その魅力を他者に伝えようとしても、自分独自の見解を持てておらず、ツギハギな知識や誰かの意見をコピペしたような話しか出来ず、恥ずかしい思いをする自分がいた。

そして悲しいが私は例外ではない。同様のもどかしさを抱える日本人は当地にも数多くいる。三十数年も日本人をやってきて何故このような由々しき事態になっているのか、原因を考えてみる。

●圧倒的な学習不足・親しみ不足・興味不足

受け身の学習姿勢だった学生時代。自身の職業専門分野に関する情報収集や学習ばかりに傾注している社会人時代。諸悪の根源は、自身の学びに対する姿勢や、興味の間口の狭さあるだろう。

●外国や異文化とリアルに接する機会不足

思えばベトナムに来る前はずっと日本人コミュニティのみで生きてきた。中高も日本人のみ、大学でも留学生と接した機会は少なく、社会人でも仕事以外で外国人と積極的に関わった機会はほぼない。外国と日本との比較、異文化と自文化との比較等、自分事として自らを掘り下げた経験が少なすぎた。

●日本語能力の低下

通常は年齢に比例して、日本語の運用能力は上がるはずだ。しかし、テクノロジーの普及により、言葉や文字だけで意思疎通する必要のなくなった時代だからか（若しくはただの言い訳か）、悲しいかな近年ますます自身の放つ日本語に深みがなくなっていることを実感する。（LINE スタンプだけでコミュニケーションを代替してしまっている自分自身を戒めたい。）

上記は私個人に関する振り返りと考察であるが、一般的な三十代日本人代表といってもいい私に言えることは、大半の同年代の日本人にも当てはまるだろう。

今の世の中、特に若い世代やこれから生まれてくる世代は、生涯を日本で日本人とだけ接して終える人は多く

ない。多かれ少なかれ日本人以外を含む多様なコミュニティに身を置くことで、日本人コミュニティの中だけで生きていたら余りにも普通すぎて意識できなかった、自分が「日本人である」ことを認識させられる機会は多いだろう。そんな中、母国や自身のアイデンティティについてしっかり腹落ちして整理されていることは、グローバル化＆多様化している世界において、他者や異文化理解の出発点としてだけでなく、何より、自分自身のルーツとゴールを見失わず、豊かな人生を送るためにも大切なことであろう。では、この現状を打開するためにはどうすべきなのだろうか。

結論は、「リベラルアーツの前に国語（日本語）の勉強からやり直す」、である。

本塾で紹介された統合智（リベラルアーツ）と専門智という対照概念についてだが、本塾が推し進めている様に、物事の本質を見る力や考える力の土台として、統合智の学習に重点を置くことは賛成である。無論、専門智を否定しているわけではない。実際、専門智は、分かりやすい尺度（点数や資格等）で測ることが出来、また職業専門性と直接リンクしているケースが多く、すぐに役に立つことが多い。とはいえ、所謂「すぐ役に立つものは、すぐ役に立たなくなる」だ。反対に、統合智は、「すぐには役立たない風に見えて、実は一生役立つ」し、さらにはあらゆる専門智に厚みを与えるための根幹ともなる。今の日本の教育カリキュラムやビジネススクールは、この土台が無い状態の人間に専門智ばかり叩き込む傾向が強いので、高学歴や専門家であっても浅薄な人が多い状況にあるのだろう。

統合智という土台智のさらに根底には、母語（日本語）能力があると考えている。1 本の木で例えると、「専門智＝枝葉・実」「統合智＝幹」「日本語能力＝根・土壌」、といったところだろうか。頑丈な根っこなしに逞しい木や実は成長しない。そもそも母語である日本語に不自由する日本人は多く、最近では Twitter の影響で 5 行以上の長文を読解することが出来ない日本人が増えているという話も聞く。そんな状態で統合智をいざ学ぼうにも、効果的な学習や成長は期待できないかもしれない。

グローバル人材を目指す者として、英語力が何より重要だと思っていたが、本質的に大事なのは日本語であったことを実感している。母語での思考や論理が中途半端であれば、例え外国語が話せても中身の薄い対話に留まってしまう。外国語は母語を超えることは出来ない、とはまさにその通りだ。

結論、世界で活躍する人間になるという大きな目標のためだけでなく、シンプルに自分の人生を豊かなものにするためにも、日本語ともう一度向き合ってみようと思う。

今回の日本のこころの本を読む際も、日本語なのに知らない単語に多々遭遇し、また毎回の意見提出の際、改めて自分自身の使える語彙や表現の少なさを身に染みた。そういえば学生時代の一番の苦手科目は国語だったことも思い出した。

本塾を通し、大人になった今から改めて国語学習が少しずつ習慣化し（小中学生向けの熟語やことわざの本を買ったりして再学習中）、渇きかけていた木の根っこに水やりを再開できていることは、幸せな人生を送る出発点として、良い糧になると信じている。

9. 番匠　友恵

1.私の課題認識

日本人は外国、とりわけ西洋への憧れが強く、衣食住によく表れている。季節感や年中行事についても、正月の設えや桜や紅葉に心を奪われる日本文化のマインドは持ち続けているものの、私たちの日々の暮らしや経済活動は欧米の文化や慣習を取り入れることに積極的だ。

食に焦点をあててみよう。クリスマスの他、ハロウィンやイースターなど、文化的背景に基づかない食文化

が浸透し始め、日本の四季の移ろいに応じた室礼や食文化は日常ではなく、意識的に取り入れるものになってきている。

2.和食文化

そういう想いから、7年ほど前から日本料理の板前である粟飯原崇光先生の教室に通っている。日本料理は、自然の移ろいの他、年中行事や文化背景、誰に提供するかということを事細かに盛り込んだ日本文化の美意識の結集である。学ぶにつれ食材の走り・旬・名残といった細やかな季節を感じられ、生まれ育った地方ではあまり食べることのなかった食材や調味料も使い始めるようになった。

室礼や器と料理のコーディネートの面から、伝統工芸にも興味が湧いてきた。美しく見えるという以上に、機能的で理にかなった漆の器や曲げわっぱも日常使いしている。

３.これから

日本における食の多様性には驚くばかりだが、和食文化は何より普段の家庭での食生活が大切である。普段から日本文化に対する感性を養うことで、日本人が長らく食を通じて築き上げてきた美意識を継承していきたい。

家庭でできる小さなことになるが、今後の人生で以下のことを実践していきたい。

（１）毎月、自分にとって新しい日本の食材を使って和食の一品を作る。

（２）日本の年中行事や伝統に触れる為、毎月、室礼を整える。

（３）和食と室礼を発信する為の SNS アカウントを開設し、発信し、世界中の人と交流していく。

11．渡辺　文隆

＜近代から現代における日本人＞

近代における日本人は強かった。開国から明治維新を迎え、当時の日本を強くしていくために改革や発展を推進する歴史に名を残す志高き人物が多く生まれ、日本の近代化や成長に大きく貢献している。

彼らは、決して自らのためではなく、日本という国のために命を懸けて改革を進めるリーダーで、そこに集まった人々にも同様に、利己ではなく利他の精神、つまり集団のために行動する哲学があり、それは古くから日本に伝わる道徳観からくるもので、**自らを律し集団の力を最大化することが日本人の圧倒的な強さ**だと思っている。

この日本人の強さは小さな島国が戦後の高度経済成長を成し遂げ、経済をリードするまでに発展した要因でもあると考える。

＜日本人のこころ＞

西洋の洋に対して、日本は和と表現されることがある。例えば日本料理のことを「和風」と呼ぶなど、「日本」＝「和」であり、**集団社会を「穏やかに調和させる」ことで統制する**ことが、これまでの日本の特徴であり強みであったと考える。

そしてこの「和」社会は、システム的なものではなく、道徳的なものであり、日本人のこころには、自らの利益を追及することが卑しく、逆にどんなに貧しくとも信念を貫き生きる美徳観が根付いているからこそ成立する、日本人にしかできない集団社会だと考える。

五感塾に参加させていただき報徳仕法を学んだが、この農村復興事業の特徴は、方法論だけではなく、そこに哲学が併せ持たれており、「分度」「推譲」の思想は、まさに日本人だからこそ通用した考えであり、**恩が恩を生み集団が成長する最高の偉業**だと感じた。

＜これからの社会に向かう日本＞
一方で、テクノロジーが発展し、集団が強みではなく、小さな力でも大きな変革を可能とするこれからの社会において、日本人としては以下の 2 つの方向性に向かうべきだと考える。
一つが、「日本社会が一つになる」ことで、地方創生による過度な東京一極集中からの脱却と、地方も含めた日本社会全体での一体感の醸成で、テクノロジーを活用した分散・循環社会を作るべきだと考える。
日本人の歴史は東京ではなく日本全国の地域にあり、その地域の歴史に日本に残すべき哲学がある。そしてその地域社会が繋がり、循環され一体となることが、日本がこれから社会で活躍するために必要なことだと思う。
そしてもう一つが、「日本のこころにより世界の諸国と集団社会を形成する」ことで、日本人がその道徳観や精神で世界に誇る集団社会を築いたのと同じように、この日本人のこころを世界に広げ、地球規模での「和」を築いていきたいと考える。
当然、世界の国々にはそれぞれの地域にカルチャーや思想があり、その異なる社会を「緩やかに調和する」なんてことは極めて困難だと思う。ただ、日本人のこころは、唯一神を信仰する宗教ではなく、様々な思想が融合された哲学に基づくものであるため、私はそれが可能なんじゃないかと、この自啓共創塾を通じて感じた。そして、これまでの歴史で神仏儒融合の思想を築き上げてきた日本人だからこそ可能とする世界観であると考える。
＜最後に＞
私が自啓共創塾に参加したのは、不確実性が高まる今後の社会において、何かを決断することが求められた際に、拠り所となり支えとなる日本人としての原点を学ぼうと考えたのが理由の一つでしたが、それ以上の気づきと学びを与えていただけたことに感謝いたします。

12. 真仁田　智（教師）
私にとって「自啓共創塾」の次世代リーダーのための日本型リベラルアーツは、縄文時代から根づいた文化と仏教・儒教・近代西欧思想等が融合した日本の倫理感を活用し、現代の課題を解決する知恵やアプローチであるという確信を得た。また、各人が「自調自考」しながら、他者とのダイアログ（対話）を重ねる中から新たな発想を得られることを経験ができたことに、心から感謝申し上げます。
これからの世界・社会に向けて提案したいのは、「人口ピラミッドを 180 度回転させる社会へのコペルニクス的転回（パラダイムの転換）」です。日本社会の高齢者を労働人口が支えるという発想を逆転して、高齢者が若い世代を支える社会へと移行するのです。高齢者となる時期からは、還暦、定年退職、子どもの自立といった節目を迎え、それまでの個人としての使命感から、地域、国家、世界、次世代へと利他的な使命感を広げる、「自啓共創塾」の日本のこころを土台として取り組む社会への転換です。
具体的には、日本の私塾（寺子屋含む）や海外の初等中等教育で行われる、15 名前後の人たちが学ぶ「学校（クラス）」を立ち上げ、「自調自考」のアクティブラーニング中心の議論や探究活動、事前事後の準備を行うフィールドワーク、スポーツ文化活動（クラブ）、ボランティア活動、デジタル技術、健康管理などを学んだ後（2 年間）、最終年はソーシャルビジネスなどを立ち上げるミッションをチームで達成する活動です。自分の存在意義と目的意識をもった活動に取り組むプログラムです。
◎実現させたいと考える理由について…利他的な目的を共有する
・平均寿命が延び、定年以降の約２０年を見越した人生の意義・生きがい（使命感）が必要になる。
・日本の社会や経済は「超高齢化と少子化」が課題とされるが解決策が乏しい状況を克服できる。

・天然資源が少ない日本だが、「人材（人生経験やこころ)」・「財力」・「人脈」は豊富で活用できる。
※駅周辺などにはコロナ不況で空き部屋が増え、進学塾の 15 時までなど教室場所を確保活用できる。
◎一番学びたいのは還暦以降の世代…個人の生きがいを着火点に
・昭和の時代の教育や競争社会の発想を変える機会を求める…経歴や学歴は不問（禁句とする）
・日本のこころが何か、自らの文化的ルーツを学びたい世代…日本のこころを発揮する
・渋谷教育学園の自調自考とリベラルアーツの学びによる成長と変化…学ぶ人たちが主体となる
※教師はコーチング的関係を保ち、自啓共創塾と同じく幅広い世代の講師を招き、話題提供と問い立てなどのワークショップを開くことで、実践的な知を共有することができる。
◎家族、地域、勤務先以外のワクワクする人間関係づくり
・学校行事、研修旅行、部活動にも取り組む…授業は討論と対話、探究活動、プレゼン発表なども
・週 3 日程度登校、午前 7 時～11 時 30 分、80 分授業×３コマ（10 分休憩)、午後アクティビティ
・授業料は月 5 万円程度、部活動は実費、研修旅行は平日、クラス単位の合唱や演劇コンテスト

13. 島津　侑香　　自啓共創塾「ＮＥＯサムライによる社会の発展」

塾を通じ、最も印象深かったのは、「真のサムライとは？剣道・弓道・合気道にみる武士道のこころ」の講義・ディスカッションであった。

特に剣道では、勝負は点数化せず、勝敗以外の部分で己を高め、勝負事だけれど礼にはじまり、礼に終わるというスポーツではあるが別の世界観があることを知ることができた。勝負を通じ、それぞれが己に勝つという心理も持ち合わせることで、その場にいるプレイヤーがお互いに高まり成長するのではないかと感じ、スポーツにありがちな根性論ではない、人間力を高める方法の一つであることを知った。またこれらの武道は、日本由来のものであり日本人らしさが形成される過程と密接な関係があることも理解できた。

これからの時代、先行きが不透明で将来の予測が困難な状態（＝ＶＵＣＡの時代に）突入し、テクノロジーの進展でＡＩの活用が進みより便利で豊かな社会の訪れも予想される。先がよめないから、ＡＩに支配されるのが恐怖だから…といったマイナス観点ではなく豊かになるこれからの時代を生き抜いていくためには、より人間力を高め過去の経験や発想だけにとらわれない自分自身の判断軸を十分に持って生きていくことが必要と考える。

その中で一つポイントとなるのが武士道であろう。「義」「勇」「仁」「誠」といった正しい行いを行うこと、寛容であること、誠意をもって接することなど謙虚さを交え相手を思いやりながら接することが自分自身の判断軸を磨くにあたり要素となってくると考える。これからの社会は、自社の利益追求だけでは足りず、社会にどう貢献し意味をもたらせていくか？ということが求められる。会社や社会の発展をイメージしながらサムライの心で接することができればおのずと社会の成長につながっていけるだろう。

ちなみにサムライ＝男性という印象なので、女性もいるのか？リサーチしたところどうやら女性のサムライも存在した様。ただやはり体格的にも思考的にも男性的であることから、これからは性別にかかわらないナチュラルなサムライ=ＮＥＯサムライが増えていくことで多様な価値観が活かされ、グッドクラッシュを起こし世の中がよりよくなっていくだろう。

14. 高野　良子

（1）これから先、どのような世の中にしたいか。そこに日本のこころはどう貢献できると考えるか。リベラ

ルアーツ、という言葉の源となった意味の「自由」、それぞれが自分を自律的に大切にし、安心、幸せ、生きがいを求めていくことができる社会。お互いの尊厳を大事にしていくことができる社会にしたい。

「日本のこころ」は、生まれた人間を上記「自由」を大事にし、求めそのために自分自身を律するような教えもある。ただ自然とあるものではなく、先人からの教え、それぞれの家庭、学校、習いごと、コミュニテイ等など、様々な共同体のなかで、単なる机上だけではなく、経験、体感、といった心身全体で学ぶものであり、本来の教えをきちんと認識し、その上で、現代的にひろがった社会により適合させて広めていくことが大事だと思う。

(2) そのために、自分がこれから、または、将来取り組んでみたいこと。

「日本のこころ」という言葉には、塾で学ぶ本来の「日本のこころ」の姿とは違い、自己主張をさせず、同質性を重視し、全体主義を好む一部の人間に都合よく使われてきてしまった経緯があると思われ、本来そうではない、ということを自分自身もより学び、広めていきたい。

「人権」という概念も西洋かぶれを考える人もいれば、大事と思いながらも、日本においては一神教的概念が無いため、根本的には無理なのではないか？という考え方もきいたことがあるが、「天賦」という言葉があり、命を大事にする古来日本からの土壌に十分期待ができるということも今回塾で学ぶことができた。まずは自分の仕事の場面でも「日本のこころ」をより積極的に意識してアプローチしていきたいし、それを周囲と共有したい。将来的には、この塾で学んだことと、日本の「法律」等を結びつけて発信していくようなこともしたいと思う。

15. 三宅　優美　　「一歩一歩身の回りから、積小為大」

目指したい世界は、虐待や少年犯罪、無差別的な事件などのない世界を第一に考えました。ニュースを見るたびに心が痛くしばらく非常に心がざわついたり、これが偶然自分の周りで起こった場合の恐怖感などは常々ありました。ただ、この現状を自ら変える努力をしようとは考えていませんでした。今回この塾でみなさんの考えや熱意に触発され、一人ではもちろん何もできませんが、身近なところからでも自分にできることがあれば、実践したいと考えるようになりました。事件を起こす人は幼少期の家庭環境や養育環境に問題があることが多く、そこを整備することが効果的であると考えます。ただし凝り固まった親世代を変えることは難しいため、孤立している子供たちを救い上げることができればと考えます。孤立したこどもたちは、人との関りから社会性を学ぶ機会がありません。子供たちの「孤立を防ぎ、人との関りをもつ場」を作り、そこでいわゆる「小学」を学び、大我の成長を促し、小我のコントロールをできるような人間に成長できればいいなと思います。これを学んだ子供達が親世代になれば、またいいサイクルが生まれていく。昔のように周りの人々とつながりやすい地域にすることは大事なのでしょう。まさに温故知新です。町内会のお祭りなど自治体のイベントを増やして盛り上げる、などもいいですし、寺子屋のような集会場を作り(本塾はまさにその先駆けですね)「小学」を学んだり、「仁愛」を感じたり、「詮議」などで考える力をつけたり他の人の知恵を学んだり、「日本語」を大切にしたり、「音楽」の良さを感じたり。それが子供たちにとって身近な存在となるような場を作りたいと思いました。その中で、心配な子はピックアップして積極的に声をかけたり、児童相談所や保健師と情報共有するなどできるのかなと思いました。日本のこころの最たるところは、調和を重んじる、寛容であるところと感じます。幼少期に小さくずれた方向に成長している小さいずれは、許容して受け入れる、受け入れないと大きなずれとなり、事件を起こすに至るかもしれません。以前本で小さな悪を許容することで大きな悪を制する話を読みました。小さい違いを受け入れていくことで、世の中は様々な個があり、その様々な個が集まって社会が

できていることを知る。違いを受け入れ、共存していくことで、視野の広い、アジリティを備えた、世界平和という未来を引っ張っていく人格につながるかもしれません。 まずは身近なところから、積小為大。目標は虐待や少年事件などの消滅ですが、その先にこのような初中教育を経たこどもたちが、アジリティを供え持ち、世界平和に貢献してくれることを願いたいです。
また、このような場に参加することで自分自身も人との関りが増え自分を深め続けることができるという利点も秘めています。自分としては、前述したような場をどのように実践できるか模索しながら（もし、同じような考えの方がいればぜひ一緒に）、まずは自分は「背中を見せられる大人」になるために、今後も今回知り合った方々などと定期的にお話したりして刺激を頂いたり、今回参考に紹介していただいた本などを読んだりして、もっともっと自分を深め、自分の腹落ちして信じる軸を作りたいです。みなさまのおかげさまで、少しその軸形成の大枠が見えた気もしますし、膨大な情報量が頭の中で錯綜してもいます。ただし自分で考えることが非常に重要であるため、「人はどうあるべきか、どう生きるべきか」模索し続けたいと思います。

16. 甘粕　亜矢

世界基準をつくり、全ての国や人、企業が同じような価値観を持ち、同じルールに則って進んでいくグローバリズムは、一見、自国第一主義のナショナリズムと比較して望ましい社会のあり方のように思いますし、私も本塾で様々な見方を学び、対話をするまでは、グローバル社会に取り残されないように日本も努力をしていかなければならない、と考えていました。しかし、これまでの学びを通して、皆と同じ考えや基準に合わせることではなく、独自の伝統や文化、言語、風土、歴史などを通して育まれてきた「日本のこころ」（日本だけでなく全ての国でそうだと思いますが）を大切にしていくことが重要なのだと考え直すようになりました。

地球上の様々な問題はグローバル化していて、１つの国で解決できるようなことは少なくなってきています。その解決方法は１つではないですし、関わる国の数だけ考え方が出てくると思いますが、その中で日本ができることは、色々な意見を聞いて柔軟に取り入れ、様々な考え方の調和を図って最善を導き出すことや、自分の損得ではなく人としての正しさや美しさを価値基準にした解を見つけ出して示すことだと思います。

しかし、今の日本にそうした力があるとはなかなか思えません。それはなぜなのか。これまで歴史の中で良いときも悪いときもありますが、日本が国として力を発揮できていた時期には、目標や価値観を多くの人が共有していたのではないでしょうか。日本人として何を大切にしていくべきか、ということを共有することで、日本人である自分のアイデンティティを確立することもでき、自信を持って行動することにつながるのだと思います。そのためにも、自分が生まれた地域、そして日本を誇りに思い、大切にしていくことができる社会を作って行きたいです。

自分の生まれた国に誇りを持つということは、自分を肯定することにもつながり、そこに恥じない行動をするということになリます。また、誇りを持つためには、もっとよく日本という国を知らなければなりません。そのためには、本塾で学んできたような歴史や偉人、政治、文化など多面的に日本を掘り下げて学ぶ場や、多くの人と関わり対話する機会、様々な体験や経験の機会を増やしていくことが重要になります。そうした学びを通して、一人ひとりがそれぞれの「日本のこころ」を自分の実感として体得することで、次には行動に移すことができるのだと思います。

本来は学校でそうした教育を行っていくべきだと思いますが、PISA などで行う国際的な学力比較に一喜一憂して教育の方向性が変えられたり、今の社会で受け入れられる又は価値が高いと考えられている理数系に重きが置かれていたりしている状況では、特に公立の学校で実践していくことは難しいと思います。また、家庭

における教育力も以前から比較すると低下している、又は格差が広がっていると言わざるを得ない状況にあります。今後は学校や家庭だけでなく（もちろんその２つを変えていくことも重要ですが)、地域の力を借りながら全体の教育力を高めていかなければならないと思います。これまで学んだことをどうしたら実践に結びつけることができるか、自分の仕事で学校、家庭、地域の３つ全てに関わっているからこそ実現できることが何かを考えていきたいと思っています。

17. 尾﨑　真理子

▼自らができること、日本のこころを持ち続けるためには

約８か月の間で学び・気づいたことを自分一人のこころに留めておかないこと

子どもや親戚、友人　身近なところで広めていくことが自分の使命

〇なぜ？

今後日本を支える子どもたちが世界で活躍していくために必要な“日本的教養”が

自然とこころに宿り正しい判断ができる人になってほしいと願いを込めて、

他者や自分を育てていくことが日本人として重要と考えるため

▼具体的関心事項

地域社会の関係が希薄になる中で、「子どもを地域で育てる」「周りの大人が一緒に育てていく」といった寺子屋のような考え方をより身近なものとして捉えられることはないかと考えた

そこで浮かんだものが、「児童館」や「学童」等の教育とは違った“子どもを育てる場”であり、ここでどのような取り組みをしていくべきか興味を持った

▼子どもたちはどのようなことから日本的な教養を感じることができるか

①伝承あそび

②四季を感じる食べ物

③日本的な行事

①伝承あそび

日本の伝統的な遊び＝年齢、性別関係なく遊べること

特にマニュアルなどはなく、大人が子どもたちに言葉で伝えてきたもので、生活の中であるものや自然のものをつかうことにより、創造する喜びや他人を思いやる心、社会性やコミュニケーションの方法を育てる学びがある

より具体的には、「うたって遊ぶ」「はしって遊ぶ」「つくって遊ぶ」など

②四季を感じる食べ物

五感をつかって楽しむ料理をどれだけ経験できるか

「冬になったから〇〇が美味しいね、だからこの〇〇をつかった■■のお料理を食べようね」と会話が広がる

また食事のマナーを通じて日本的礼儀作法を学ぶ場になる

③日本的な行事

七五三やお正月など有名なものから「冬至」や「彼岸」など、日本文化と行事を学ぶことで日本の歴史を知ることができる

→これらは「教育で学ぶ」ではなく「人が人に伝承していく」ことが重要

▼私が考える今後の夢（ビジョン）

今後の日本を支える日本の子どもたちには、主体的、対話的な学び方をしてほしいと切に願う
まさに「アクティブ・ラーニング」は、寺子屋の教育そのものだと感じた　一方的に教師の授業を聞くのではなく、同じ教室にいる仲間たちに教えてもらったり、教えたりしながら生徒たちは主体的に学んでいた　こうした学びが明治維新以降に優れたリーダーを排出したり、西洋から入ってきた文化を理解したりすることに役立ったのである
寺子屋のような教育機関がもっともっと増えていくことを願う
いつか自分も微力ながら子どもたちへ伝えていく手伝いをしたい

18. 深村　誠　　『百人一首』で「日本のこころ」を輸出

この塾に参加させていただき、「日本のこころ」が自然を克服し利用する対象ではなく、共に生活し、共に存ることを基本にした価値観であることを再確認しました。その結果として、グローバル化が進む現代においてこそ、この「日本のこころ」を世界に輸出する必要性を強くしたところです。ではどのようにして「日本のこころ」を輸出するかというと『小倉百人一首』を現地語化するという方法です。
『百人一首』を現地語に翻訳することはそんなに難しいことではないと考えます。どこの国にも自然に関わる言語は存在するはずです。第一段階は直訳で充分です。現地語の特長を生かしながら、翻訳可能な現地語を探してもらう。日常使っている言葉を見直すきっかけともなるし、埋もれていた言葉を再発見する機会にもなるでしょう。そのうち直訳だけでは満足できず、韻や反復といったリズム感を意識するようになり、縁語や掛け詞といった修辞法も意識するようになる。終いには自分の歌を創作したいという意識に発展するはずです。
ではなぜ『百人一首』かというと、3 つの理由があります。1 つは短歌が「三十一文字」と呼ばれるほどの短詩形式であるということ。2 つめは自然を題材にした歌が多いということです。3 つめは『百人一首』が、日本の古典文学、中でも歌集としての完成形であるばかりでなく、かるた取りに代表されるように遊戯としての付加価値も備えているからです。
藤原定家(1162～1241)による『小倉百人一首』は、飛鳥時代から鎌倉時代初期までの 100 首を、『古今集』から『続後撰集』までの勅撰和歌集から選んだとされます。恋の歌に次いで多いのが自然を詠んだ歌 32 首です。日本には明確な四季があり、四季折々の美しさや風物を生活の中に取り込みながら、繊細で豊かな感性を育んできたといえます。時候や自然現象を表現する言葉の多彩さは他の言語に類を見ません。そのうえ荒々しいものや奇抜なものは含まれていず、優美なものに限定されていることです。この傾向は、飛鳥の時代から定家が生きた鎌倉時代前期の約 600 年をかけて日本人の美意識として形成されたといえます。それが伝統となり今に及んでいる。現代日本人の美意識は、飛鳥の時代から脈々と受け継がれてきているといえるのです。
『百人一首』の現地語化というのは、どの国・地域にも狩猟採集時代には、自然を畏怖し、自然と共存していた時期があり、自然に対する本能的ともいえる憧憬があると考えるからです。現地語（母国語）の作業を通して、自然をより細かに観察し、言葉を使い分けたいという欲求も出てくるでしょう。その過程で、忘れかけていた自然への共感能力を復活させることができるのではと期待します。また、歌にはリズムがあり色彩感があります。全ての国・地域の人々が身体感覚で魅力を感じるはずと確信します。
　『百人一首』の現地語化作業では、日本の習俗などを説明する場面も想像されます。和服の機能性と自然を取り込んだデザイン、和食の素材を生かし彩り豊かに盛り付ける繊細さや和食器の精巧さ、中世以降の武士道や芸能に代表される礼儀や勤勉さ、歌舞伎や俳諧に見られる娯楽性や諧謔性いった日本文化の全体像を紹介することができます。

「日本のこころ」の先に「誰一人取り残さない世界」が見えてくるように思います。

19. Ｋ　Ｏ

これからの「世界・社会」が直面する大きな課題は、いずれも「分断」という言葉で表されると思います。つまり、政治的世界においては、ご存じの通り、米国を中心とする民主主義を標榜する世界と、中国・ロシアが代表する強権国家が対峙していく趨勢は止められないように思われます。一方、我々をとりまく世界（社会）も、情報のサイロ化（格差）による分断が進んでいるように見受けられます。インターネットの発達に伴い、人々は自身の好む情報だけ収集するようになり、Web サイトのリコメンド機能でさらにそれは純化されていっています。人々の考えは両極に広がりつつあり、その接点がますます交わらなくなっているのではないかと危惧しています。

そのような世界・社会において、日本人の寛容かつ融和的な精神は極めて貴重なものだと思われます。日本の歴史を翻ると、例え敵対する勢力であっても、徹底的につぶしたり、根絶やしにしたりはしてきませんでした。明治維新がその顕著な例だと思われます。政治的な分断でも社会的な分断でも、他者に対する寛容さを持ち続けることができれば、最終的な破局は回避できるはずです。

しかしながら日本人は一方で、民族的な排他性を強く持っています。国内でも朝鮮人やアイヌに対する差別や偏見は根深く残っており、特に残虐性を表すこともあります。つまり日本人の寛容さは、残念ながら同胞たる日本人同士だけで成り立つものなのかもしれません。

日本のこころが、今後世界の分断を癒す役割を演じていくためには、我々の寛容さや融和の精神をさらに昇華し、グローバルレベルでの同胞意識に高めていく必要があると思っています。そのためには学校教育の段階で、日本的情操教育を深めていくと同時に、諸外国との交流を日常的に促進することによって、グローバルな感性を身につけていくことが重要であると思っております。

私は現在、会社勤めの一方、母校の理事会の評議員を務めています。息子も在学することから、保護者会の会長も務めており、学校教育に関わる時間が増えております。学園のドクトリンでは、「世界に開かれたリベラルアーツ＆サイエンスの学園」となることをうたっております。これは１００年前の創立以来の本校の理念を、現代的に再確認したものです。

私がこれから取り組めることは、母校のリベラルアーツ教育に対し、様々な形で提言し支えていくことだと思っています。今回私が自啓共創塾に応募したのは、日本型リベラルアーツにたいする理解が少しでも深まればと思ってのことでした。私は講義を通して様々な方々のご意見にふれ、素晴らしい刺激をうけました。その中でも、第１３回の講義は非常に示唆に富んでいました。日本で最近はやりのリベラルアーツは、どちらかというとサイエンスに寄っており、東洋でいう「小学」の素養が足りないということがわかりました。特に音楽の素養が、人間的成長を促していく上で、非常に重要な要素であると理解しました。今後機会があれば、学園へのアドバイスとして、日本型リベラルアーツを推奨すると同時に、音楽関係の講義を取り入れるサポートなどできていければいいなと思います。

この度は、貴重な講義に参加させていただき、誠にありがとうございました。

20. 堺　勝信　　『世界のための日本のこころ』の在り方

① あらゆる対立構造（×）を包摂し調和・共生（○）へ

「日本のこころ」とは、古代以前からの独特の風土・自然の中で育まれてきたアニミズム的な要素を含む多神

教である古神道をベースに、仏教や儒教と習合して形成された霊性を核とした、日本人の生活観、社会観、世界観を支える人格の基礎である。
また、河合隼雄著『中空構造日本の深層』によれば、天と地、海と山といった二項対立的な神の間に何もしない無為の神がおり、三神の組み合わせ構造によりバランスをとれる形になっている。この中空構造ゆえに、一神教・二元論的な思想に対して、あらゆる二項対立を包摂できる可能性を強く秘めている。
①人間×人間(生産者×消費者、従業員×顧客、男性×女性、若者×高齢者、白色人種×有色人種、国籍、民族、宗教/信条、社会的地位、性的指向・性自認、価値観、働き方等)、②人間×自然、③文化×文化（都市×地方、西洋×東洋、先進国×発展途上国）といったあらゆる対立構造ではなく、それらを両立・調和させていくことが重要である。
特に「地球環境の危機」と「生命科学の進展」に対する「日本のこころ」の表出として、「風の谷のナウシカ」の世界観・問題提起はかなり深い。核兵器により穢れた地球とそれに適応するために遺伝子操作された生態系。人工的につくられた「いのち」も含めてそれを包摂する自然。憎しみよりも友愛、対立/分断よりも共生。これからの世界・社会の在り方として、調和・共生という方向を目指すのは Must である。

② Back to Basics： "自然の摂理"に従う縄文文化・アイヌ文化の価値の再発見

欧米では個人主義がベースとなり「自由」が大事な価値観となっているのに対して、日本においては「自然」が大事な価値観となっている。どのような”理(ことわり)”が世界共通の価値観になりうるかを考えた際に、”論理”では前提となる公理の善悪の議論には答えられない。”倫理”も、個々の宗教・倫理観を包括するメタ倫理的な共通の価値でないと世界的な合意は得られない。”自然の摂理”というのは世界中の先住民族の知恵に共通するものであり、見直すべき価値観なのではないだろうか。
自然や環境との調和、共存を図り、対人武器を作らず戦争を避け、女性・母性を尊重し、富の公平な分配と平等を重視する社会を、継続し維持できた縄文文化。そして、アイヌ文化も、農耕文化による余剰→格差のない狩猟文化であり、(蛇足であるが余剰を記録するための文字がなく、）自然（天・地）と社会（人）の調和がとれたサステナブルな状態、かつ足るを知る精神的にも非常に豊かな文化である。
限りある資源を収奪し続ける現在の資本主義の価値観に対して日本が誇れるものは、この縄文文化・アイヌ文化である。京都の龍安寺の蹲踞（つくばい）にある「吾唯足知」（われ、ただ足るを知る）という「分度」につながる精神と、日々の生活を楽しみながら自然と共生する知恵の価値を再発見することによって、日々の生活をより豊かさに幸せに生きられるのではないだろうか。

③ 「分度・推譲」による経済＋道徳の社会変革

二宮尊徳は、「勤労・分度・推譲」の「報徳仕法」により経済的にも精神的にも豊かになる地域改革を実践し、かつそこで確立した方法論を他地域に展開することによって国家を斬新的に改革することを目指した社会変革者でもある。富国安民というビジョンに向けて、実に 35 もの地域での仕法を進めた。
「報徳仕法」の中で特に着目すべきは、「報徳冥加金」である。「報徳無利息金」によって「支えられた者」が義務ではない冥加金を推譲することにより他者を「支える者」になる、という経済的にも精神的にも豊かになる方法を示している。個人としてはペイ・フォワードもしくは利他の一つの形であり精神的な豊かさに通じるし、社会全体としては経済的にも精神的にも豊かな人を増やすための仕組みである。

④ ウェルビーイングとサステナビリティーの両立と数学的帰納法

自分自身の幸せの構成要素は①健康、②人間関係、③趣味である。毎日、健康のために 8000 歩以上歩くため、妻と近所の公園をおしゃべりしながら散歩している。散歩しながら手持ち無沙汰でゴミ拾いをしていたら、色

んな人が挨拶をしてくれて話すようになり、一緒に花鳥風月を愛でるようになった。また娘とピアノを連弾したり、この自啓共創塾をきっかけに合気道の道場に通いだしたりもして、日々の小確幸を実感している。
また個人の消費者としては、サステナブル資本主義を意識して、コンポストをつくってみたり電力会社をハチドリ電力に切り替えたりしたが、今後もモリウミアスを応援したりサステナブル投資につながる消費行動を楽しんでいきたい。
そして社会人として仕事という生産行動においては、クライアントの経営課題が社会課題とアラインしてきている中で、Financial の観点だけでなく Sustainability や Inclusion & Diversity といった観点の KPI も含めた 360° Value Meter（〇）を設定して、クライアントの経営課題を解決することで、その先の社会課題も解決していきたい。
ところで、数学的帰納法は証明の手法の一つで、自然数に関する命題 P(n) が全ての自然数 n に対して成り立つ事を証明するために、①P(1) が成り立つ事を示す。②任意の自然数 k に対して、「P(k) ⇒ P(k + 1)」が成り立つ事を示す。③1 と 2 の議論から任意の自然数 n について P(n) が成り立つ事を結論づける。というものである。
自分のビジョンとしては、最大多数の幸福(ウェルビーイング)とサステナビリティーが両立する未来をつくりたいが、P(1)は自分自身の実践により成立する（と、言いたい)。P(k)が成り立つ際に、「分度・推譲」により経済的にも精神的にも豊かな人を増やすことができ、P(k+1)が成立する。よって、P(世界の総人口約 80 億人)においても幸福(ウェルビーイング)とサステナビリティーが両立する未来が成り立つ、といえよう。
世界的なサステナビリティーという課題に対して、「課題解決先進国」として世界に先んじて、自然と共生する形で各自が精神的にも豊かに幸せに生き、そしてそのような人を増やす。それが、「世界のための日本のこころ」の一つの在り方なのではないだろうか。

21. 川本　史生

まず背景を共有します。私は小学生の時からプログラミングをはじめ、高校生の時から AI についての勉強を始めました。私は機械学習のような「弱い AI」を仕事で使いつつ、興味の対象は昔から「強い AI 」について考えることにありました。人が考えるとは何か、よりよく理解したい、という主観的な方向と、脳の機能についてよりよく知りたいという客観的・脳神経学的な方向から勉強を続けています。知能とは何かを議論するためには哲学の知識が必要で、大学のころから主に独学で西洋哲学の勉強もしていたのですが、三宅陽一郎氏の本でも言われているように西洋哲学・ロゴスに基づいたアプローチだけでは限界があり、東洋哲学の空・道・混沌といったアプローチも必要と考えています。今回自啓共創塾に参加して、参考資料を読み話題提供の方の話を聞いているときも、それを AI にどう関連付けられるかということを常に考えていました。
私が実装可能性を調べている、（強い）AI が考えるとは「内面世界観を持ち、主観的に決定・判断をする」というように言いたいのですが、これだけでもいかに挙げるようにまだまだ疑問が多々あり、学びは当分続きそうです。

- “考える”を人以外に適用するとはどういうことか？言葉のフレームを拡張して意味がなくなるのではないか？ref. 潜水艦は泳げるのか？
- 主観的な現象をどう認識するのか。計測するとそれは所詮客観データではないか。
- 決定・判断をする必要はなぜあるのか？生存のための基礎欲求、人間の側頭葉の機能を組み込むのか？

どのような世の中にしたいかという点についてですが、まず私の感覚では「世の中そんなに悪くない」と考え

ています。昔と比べると、生活水準、技術環境など、総じて良くなっていると思います。過去のピンポイントの現象を指してあの頃はよかったという話は、世間話としてはよいかもしれませんが、現実にはその時点での生活環境・情報水準など、相当悪いけどいいの？と考えてしまいます。数年前に流行った『Factfulness』の影響もあるかもしれませんが、悪いことにより大きく反応するのはプロスペクト理論などでも言われる人間の本能でありそう感じて反応するのは生存のためには必要なのかもしれませんが、情報過多な時代にそのためにやたら悲観的になっている人を見ると気の毒に感じます。社会問題も、最近悪化したというより、常に考えるべき社会問題は存在しているので、時代を超えて比較するのは、言語構造や価値・社会構成がそもそも違うのに、果たして比較することにどんな意味があるのかと考えてしまいます。それを現在の言語や基準であえて比較すると、恣意的に現在が色々悪化しているとかなんとでも言えるような気がします。それぞれの時代に取って重要な問題がある、というので十分ではないかと思います。例えば差別・格差などは、どの時代でどの程度言語化されていたかも大事で、まず言語化されなければ認知されず直接歴史にも残りません。

AI というと定義がモヤモヤしてしまうので、 弱い AI を含めてソフトウェアという言葉を私は使いますが、ソフトウェアによってより便利で効率化された世の中を私は期待しています。このソフトウェアが新たに導入されるということは、新たな言葉を含めて環境が変わり続けることになると思うのですが、人の脳は基本的に、安定してあまり頭を使わないですむ世界に快の感情を持つと思うのですが、これに適応するというハードルをこの多様性のある世の中でより優しく行えるような、優しいソフトウェア、優しい AI のようなものの整備が今後必要だと思います。この優しさは言語レベルでの対応も必要だと思うのですが、適度に曖昧さを持った日本語が、この点で参考になるかもしれません。ソフトウェアによる効率化に関連して言うと、「AI に仕事が奪われる」ではなく、「（弱い）AI でさえできるような単純な作業を人間がしなくても良くなる」と捉えます。

本塾に参加したことで、リベラルアーツについてよりよく学べたと思います。私なりの解釈としては、これは「自由に考えるための教養」であり、自由に考えるとは、価値の軸を持ち、人に与えられたり、どこかから持ってきた劣化コピーのような価値観ではなく、自分の価値観を持ちそこから発想し決断することになります。このように自らの軸をもって決定するということは、そもそもリーダーに必要不可欠なものではないでしょうか。このようなバランスの良い教養を持ったリーダーが、意思決定を行う世の中が良い世の中なのではと思います。リーダーだけに教養があっても問題で、やはり市民がリベラルアーツを身に着け、リーダーを選び、応援し、行動する。そのような世の中でないと、偏ったり、変に煽られて極端な行動をとる社会になってしまいます。今回のパンデミックで、そのような負の面が日本に限らず見られたような気がします。このような教養を使いこなしつつ、日本のこころでも何度も話題になった禅や利他、和の考えに慣れ親しむことで、相互に助け合うことのできる社会・文化が構成されると思います。

これから行いたいこととしては今回塾で学んだことを（主に強い）ＡＩについての勉強に取り入れていきたいと思います。細かく言うと長くなるので箇条書きにすると

- 思考の生じる場としての時とは、現象学的、デリダの差延、道元の有時、縁起ある意味超ひも理論的な点から考える
- 人が認知する世界、超越論的主体、自分を構造化して想像しているレイヤーが上位に存在、前頭葉機能など考えられるがそれがどのように機能しうるか
- 認知内、言語化された世界では論理がとても強力だが、認知外の世界では、日本のこころが役立つのでは。臨在感的把握、阿頼耶識、混沌、道など
- ＡＩを個人レベルの機能・現象と制約する必要はあるのか。文化・社会レベルの機能・現象がＡＩである

とはいえないのか

- 言語のタブローは人間のために構成されているが、コンピュータプログラムより成るＡＩが言語を構成する場合、人間に準じる必要はないのではないか。言語化、記号で表せる世界の限界、人の創発、知識創造のプロセスは、ＡＩではどのように記述されるのか。
- 一神教ではなく多神教ベースの世界観でもＡＩを考える。ＡＩにとっての真善美とは、倫理とは、責任とは

リベラルアーツの重要性を考え、歴史・芸術・哲学・科学をバランスよく学ぶことの重要性を、これからの社内教育で広めていきたいと考えます。自啓共創塾のフォーマット自体がとてもよくできていると思います。予習した内容についてお互いが意見を発表しあうというのは、学習効果が非常に高いと思うので、こちらも社内で広めていきたいと思います。

個人的には禅・マインドフルネスは以前からストレスコントロールのために行っているのですが、これらについてはより深く学ぶ価値があると塾で思いましたので、Zen2.0 のようなカンファレンスをはじめ、より接する機会を増やしていきたいと思います。昔親に茶道を教わってすぐやめたことがあったのですが、塾でたびたび「ＯＯ道」の話が出てくるたびに「あの時もっとやっておけばよかった」と思っていました。道具はそろっているので、来年は茶道をまた始めようと思っています。

最後に、今回の塾に参加できてとても幸運だったと思います。これまでなんとなく考えていたけれども言葉にできないことが多くあったと思うのですが、グループダイアログを通じて自分の考えを言葉にする脳筋が鍛えられたと思います。惜しむらくはコロナのために、ほかの塾生の方たちと直接会う機会がなかなかなかったことです。この塾生同士のつながりもこれからの財産になるのではと思います。総じてこの越境的学習のお陰で、『LIFESHIFT』がいうところの"変身資産"がだいぶ増えたと思います。

22. 森岡　泰臣

世界にとって日本は必要な存在であり、その存在感はこれから日増しに増していかなければならないと思う。必ずしも日本が優れているから日本のこころを他国にも広めるという穿った気持ちではなく、日本がこれまで歩み、連綿と伝わってきた文化や伝統、神・仏・儒の習合に見る様々なものを上手く取り入れ自国のものにしていくセンスは、戦争を経験してしまい自己肯定感が低い日本人が多く、現在の日本のこころが優良と言えない部分もあるかもしれないにしても少なからず今も息づいている。これらの点で日本が世界に対して貢献できる事は多くあると思う。

昨今の SDG’s の思想は、元々日本は行ってきていたわけで寧ろ日本発信でなければならなかったくらい日本が先導してきていたはずの行動・思想と思う。

日本は、決して大きな面積でなく、また島国で、気候的にも四季を巡るがゆえに育まれてきたものがこれまでの日本の歴史をつくり、そして日本のこころも築かれてきている。過去に比べて、明らかに日本人のこころが変わってきてしまい決して良い方向に向かっていないように思うものの、それはどの時代・年代に於いても同じように感じてきた世代がいたのではないかと最近思うようになった。如何なる状況になっても必ずどこかで変化が生じ日本のこころが芯の部分が崩れることはなくしっかりと日本・日本人に息づいていくのではと感じている。

日本は、他国に類をみない文化・伝統・歴史がある。が、諸外国・各国の当人からすれば同様に類をみない文化・伝統・歴史が必ずある。その中で日本は、習合という点で上手くより良いものにしてきた経験がある。上

手く折り合いをなしていくという点が日本のこころとして貢献できると考える。その上で、世界に貢献するには世界そのものを知る必要があると思う。自国が如何に良いから是非同じようにしてほしいと思っても、他国にとっては違うはずで、その違いを理解するにはその国の事も理解し、その上で渡り合っていくべき。
そのためにも日本とは？日本のこころとは？というところをもっともっと学んでいくと共に世界とは？世界の各こころとは？も学び、それを踏まえて海外の人たちと交流していく必要があると思う。
世界に日本を浸透させる、そして架け橋になるためにもこれからも年齢関係なく常に学びを続けていく事が大事だと思い、引き続き日本の真のこころとは何か？世界とは何か？を学び続け、その知識を糧にして仕事上、海外とのやり取りの際に反映させられるようにしたい。

23. 梅本　麦人

日本は物質的にはとても豊かな国でありながらも、国民がみな幸せを感じて生きているかと聞かれたら、疑問が残ります。競争社会で生き抜くことにストレスを感じ、自分が生きることで精一杯、他者に気を配る余裕なんてない、むしろ溜まったストレスを、他者を攻撃することで発散する、昨今の日本はそんな世の中に見えて仕方ありません。その結果、ルールばかりが増えて、若者たちはストレス発散の場を探し、カウントダウンやハロウィンなど、機会を見つけては街で大騒ぎをして暴徒と化す、それを見てまた規制を強化する、そんな悪循環の中で私たちは息苦しさを感じているのではないでしょうか。
この一年、自啓共創塾で知った「日本のこころ」は、そんな今の日本とは１８０度違う、自然と共存し、お互いが支え合いながら生きる、ほんの少し前のこの国の姿でした。独特の風土と恵まれた自然環境の中で育まれた豊かな精神文化、神仏儒を習合して練り上げられた「日本のこころ」は当時、世界を魅了し、現代に生きる私たち塾生をも魅了しました。
環境破壊によって将来的な地球の存続が危ぶまれている中、確実に将来それら大きな問題と向き合うであろう子孫を残しながらも、私たちはなにもしないで良いはずがありません。[私たちはいつの間にか、大切なことを失ってしまっている]という事実を皆が知ることで、一人ひとりがほんのわずかでも他者や環境問題へ配慮するようになれば、やがてそれは大きなムーブメントになっていきます。私たち日本人こそ、その世界的なムーブメントを先導する役割を担っているのです。
そのためにも、自分自身がもっと学びを深めながら「実践」し、もっともっと社会で活躍していくことが重要と感じました。
決して学んだことに酔いしれることなく、ここから実践に落とし込んでいくこと、それこそが、二宮尊徳が我々に残した最も重要なことのように思います。

24. 嶋田　吉朗　　「これからの世界・社会に立ち向かう日本の夢（ビジョン）」

　自啓共創塾では、様々なトピックから日本のこころについて議論を行なってきた。その中で、本塾が目指す「日本のこころ」には固形的な実態があるのではなく、現代の我々が、何らかの意思を持って選びとる流動的な総体として捉えるべきものという理解を、共有することができた。明治維新のリーダーたちが時代変革のために江戸幕府に先立つ伝統的な天皇の権威を戴いたり、新渡戸稲造が武士道を近代的な国際社会の倫理を意識しつつ再解釈して西洋社会に発信したりしたように、時代の要請に基づく伝統の選択的解釈は、それがどのような主体によって、どのような意味において選択されたのかに自覚的である限りにおいて　―そうした留保が抜け落ちた場合の副作用もまた、日本社会は経験してきている―、有用性を持つと信じる。上記のようなプラ

グマティックな観点に立つならば、「日本のこころ」を活用する対象を定めることが重要となる。現代の日本・世界が抱える問題は言うまでもなく多岐にわたるが、私は政治的な主体性と対話の精神を「日本のこころ」と関連づけながら教育に生かすことが可能であると考える。
選挙権年齢の引き下げもあり、主権者教育が求められている中、日本人には伝統的に「お上」意識が強いとされ、政治的主体を養う教育と伝統とが結びつき難い現状がある。しかし、「日本のこころ」の全てが、受動的な態度に結びつくのではない。例えば今回の塾において何度も言及された、「日本のこころ」の構成要素である武士道は、主体的に公に尽くす政治的エリートの気構えの体系と理解することができる。西洋社会のノブレス・オブリージュや市民道徳(Civic Virtue)と同様に、古今東西、利他性などの徳や自制心を備えていることは、文明社会の公共的空間でのコミュニケーションの前提として理解されてきた。
大衆社会の時代となると、政治参入におけるこうした道徳上の障壁は留保の上で、従来の政治コミュニケーションでは抑圧されてきた社会的弱者やマイノリティが公的な政治制度の外側から権利を訴え、それを獲得してきた。その過程は必然的に精神的・物理的な剥き出しの衝突という形で現れ、従来のエリート的政治倫理の外側にある場合も多かった（従前の倫理を実際にエリートたちが実践できていたかは、全く別の話である）。このことはそれまでのエリート的支配の限界を表しているが、倫理的な心構えが政治に不要になったかといえばそのようなことは全くない。社会の多様性が増すほど、平和的に対立を乗り越えるための利他性や寛容・忍耐などの心の習慣は求められるはずである。
この、多様性の包摂と共通の倫理的基盤の必要性というジレンマを乗り越えるためには、政治には誰もが参入すことができるという前提を維持しつつも、粘り強く平和的に合意形成を目指すための共通の道徳を模索する必要がある。その時求められるのが、道徳教育であり、その手段として「日本のこころ」を考えることができるだろう。禅の心のような、自己と世界との一体感や、主体性と利他性を涵養するために、一方でそれが単なる滅私奉公的抑圧とは区別されるように、注意深く教育を組み上げていく必要があるだろう。

25. 大野 丈

私は障がいのある方とそのご家族が健常者と一緒の選択肢を持てる社会、すなわちノーマライゼーション社会の実現に向けて命を燃やしていきます。なぜなら、私自身が障がいを抱えた方々に対して無知による差別をしていた当事者であり、自身が無意識に差別をしてしまっていたということと、人と人の間に上や下というものは存在しないということを知的障がいを抱えた友人に教えてもらったからです。その友人とは自身が大好きなサッカーを通じて知り合ったのですが、一緒にボールを蹴り合うなかで、その友人の優しさや他者に対する思い遣りに触れることで、人として在り方や人は他者や社会に生かされているということを知りました。出会った当初は、知的障がいを抱えているということで、自身がサポートしないといけない、何か手を差し伸べないといけないと思い接していたのですが、一緒に時間を過ごすなかで、それは無知による差別であるということに気が付きました。それまでの人生で障がいを抱えた方と一緒に時間を過ごすことがなく、ニュースを中心とするメディアの情報をもとに「障がいを抱えた人は可哀そうな人」という勝手な障がい者像を抱いてしまっていたのです。自身としては誰にも平等で誠実に接することを心掛けていたので、気が付いた当初は非常にショックでしたが、人に優劣はなく、自分のできる範囲で他者の役に立つ大切さに気付くことができ、人生にとってかけがえのない経験となりました。
自啓共創塾を通じて、日本のこころはノーマライゼーション社会を実現するために大きな貢献をすると確信しました。個人ではなく、人と人の和を大切にしている点、神道、仏教、儒教と異なる宗教をそれぞれ認めてき

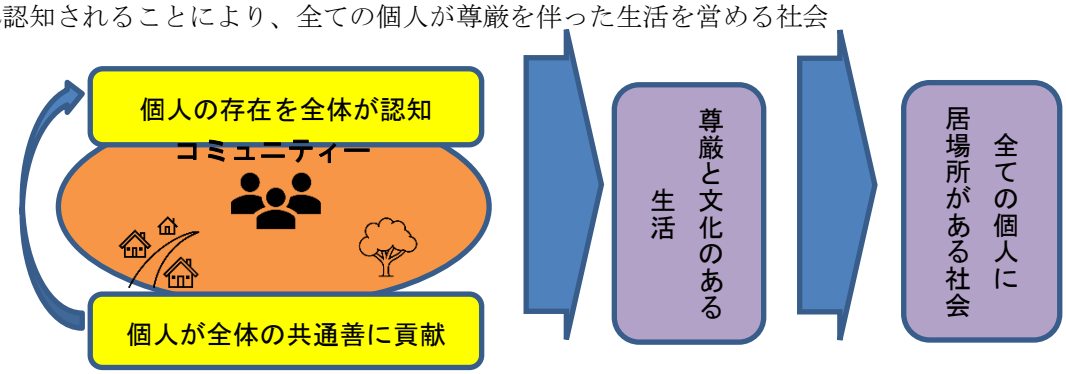
たこと、パリ講和会議において、世界で最初に国際会議において人種差別撤廃を明確に主張したこと、日本は古くからノーマライゼーションを体現してきたということを知ることができました。厚生労働省の調査によると、現在、我が国において、障がい者への差別や偏見があると感じている人の割合は 83.9%にものぼります。また、親族に障がい者がいるという理由で結婚が許されないということや、スポーツや音楽の習い事を受けることができなかったり、健常者と呼ばれる人たちが当たり前のように行使している権利を障がい者の方々は制限されています。私は障がいというのは人にあるのではなく、社会にあるものだと思っています。人それぞれ得意なこともあれば苦手なこともあるなかで、お互いに助け合うからこそ豊かになれるのではないかと思います。ノーマライゼーション社会を実現するために、現在所属している株式会社 Lean on Me では研修サービスを通じて、社会に対して障がいに対する正しい理解を促し、個人においては学生を中心とした若年層のキャリア支援を行っているので、障がいをはじめとする多様性の大切さを伝えていきたいと思います。自啓共創塾を通じて日本のこころを学ぶことができて、自身の志が明確になりました。貴重な学びの機会を提供していただき、ありがとうございました。

26. 竹上　昌毅　　【これからの世界・社会に立ち向かう日本の夢（ビジョン）について】

最後のレポートを提出します。なかなか具体的な行動計画にまで練ることができず、概念の整理に留まってしまいました。自啓共創塾での１５回の学びにより多様な考えに触れ、また、普段なら読まないと思われる書籍を多数読むことができました。少なからず自らの視野を広げることができたと自認しております。このような貴重な機会をいただきましたこと、関係者の皆様に改めて御礼申し上げます。

1. 全ての個人に居場所がある社会の実現を目指す

全ての個人がコミュニティーの“共通善”に対して何らかの形で貢献し、その結果、コミュニティーから評価され認知されることにより、全ての個人が尊厳を伴った生活を営める社会



2. 上記１のために必要となる事項
   - 全ての人が“統合知”を獲得して人間力を高め、知的格差の少ない社会と、突出した才能を育む教育の共存を実現
   - 多様性を受容し他者に寛容、且つ、他者を真摯に高く評価できる人間性の育成
   - コミュニティーの範囲を柔軟に拡縮し、他者と共存するために協働して問題解決ができる集団知の獲得（コミュニティーの対象は自然にも拡大）
3. 上記３のために日本型リベラルアーツ教育に求めるもの
   - 自らを理解し（含む歴史）、他者を理解し（他国の文化、宗教等）、世間を理解できる知識の教育
   - 諸学問を結びつける目的や価値の理解力、日常生活における思惟や行動の指針力、道徳や宗教にまで

連なる人生観と世界観を養う教育（東京大学出版会“教養教育と統合知”編者：山脇直司）

- 未知の概念・文化と、自らの概念・文化を習合する力の育成
- 和をもって貴しとする精神の醸成
- 漢字カナ交じり文を駆使することによる、高い思考力・知的伝達力の育成

4.　自らが取り組むこと、将来取り組みたいこと

急に話は小さくなりますが・・・まずは、改めて自らが学び直し、統合知の獲得に務めます。そして娘達に日本型リベラルアーツ教育を実践し、次の世代への継承を託します。

27. 小泉　哲広

自啓共創塾で学んだ約 8 ヶ月間、振り返ってみればまさに自調自考の連続でした。自身の中でどこか曖昧だった日本の成り立ちと生い立ちを振り返り、その時代その時を生きた人の思いと行動を追体験する作業は、毎回時間が足らないと感じる内容で、毎回何かしら気づきをいただいた時間でした。参加者にこれだけ年齢の幅があり、豊富な経験と多様な価値観をお持ちの方が揃っているからこそ、自分の中にはない、もしくは気がつけていない、様々な視点で「日本のこころ」を探ることができる。他者の意見があるからこそ、自らの思考や価値観を変えていくこともでき、そうやって私達自身が自ら答えを出していくその過程にこそ価値がある。学びとは与えられるものではなく、自ら気づき築くものであり、情報や知識ではないこと。それを改めて教えていただいたことが、何よりの収穫でした。また「にほんのこころ」とともに、自分の源流を探す旅でもあったと思います。

最終レポートのテーマとして、私は生活を一番にあげました。それはアニミズムから始まり明治以降までは色濃く受け継がれていたであろう日本的霊性と、それを基調に神仏儒の習合によって出来上がった数々の文化風習。またその奥にある思想や哲学が、今現在自分自身が実際に感じ、共感できる一番身近なものであったからです。そして一連の塾活動を通して、なぜ多くの気づきを得られたかと言えば、それは過去の体験や経験知識と紐づくからであり、そうやって腑に落ちて感じられるからこそ納得でき、深い理解にも繋がる。何よりも自分の感覚でモノゴトに触れる機会をつくることが出発地点だということが痛いほど分かったからでもあります。11 月に参加させていただいた五感塾がまさにその典型でした。何を学ぶのかではなく、どう学ぶのかということです。

塾と自学を通して、神仏儒の世界は一つ一つが奥深く、それらがベースとなっている日本独自の文化、風土、風習、芸術、〜道が、実は身の回りに溢れていることを再認識しました。「にほんのこころ」を形作る個々のピースとして、それぞれに素晴らしい価値観があり、普遍的で言語や人種、国を超えて評価される思想や哲学があることもわかりました。

ではどうしたら、この「日本のこころ」に秘められた本質をきちんと理解し、受け継ぎ、そして次の世代へ渡していけるのか。それにはまず教育を変えることが最初に考えられますが、人も時間もお金も、沢山のリソースが必要となるため物理的な限界があることは周知の事実です。またその公共性からどうしても対応ができない、変えられないものも出てくるでしょう。だからこそ、個々人の毎日の生活に根付く形で、繰り返し繰り返し、大人は意識的に、子供は無意識にそれらを受け取りかつ手渡すこと。各家庭や地域で、老若男女問わずそれを続けること。その機会や場を創ることが肝要なのだと思います。

失われたように見えて、中にはしっかり受け継いでいるものもありました。教本で取り上げられている偉人と自分との乖離が大きいと感じつつも、同時に共通点が見つかることもありました。それは、現時点でも常日頃

から無意識に触れて受け継いでいるものがあるからで、だからこそ日々の生活を重要視する必要があると考えます。西洋哲学が普遍性をベースにしているのに対し、東洋哲学が社会や生活をベースにしているように、忙しい毎日の中で蔑ろにされている「日本のこころ」の欠片を見つけることが大切なのではないでしょうか。国際規模で世界的な大局観を意識することも、もちろん大事ですが、社会は人が作る一人一人の意思と行動の集約です。過去の日本人がそうしてきたように、今を生きる我々が日々の営みの中でも出来る小さな習合を絶えず行っていくこと。個々人の選択や意思から変えられるもの、それでしか変えられないものがあるのではないでしょうか。
個人的には来年から音楽関連の習い事や武道の道にも足を踏み入れ、また家族親戚を始め身近な人たちと一緒に、二宮尊徳さんの芋誇示会、薩摩デュケーションを取り入れることもしてみたいと考えています。この塾を通して学んだことを糧に、引き続き日常的に「にほんのこころ」を実感しつつ、自調自考を続けていきたいと思います。

28. 原田　剛志
自啓共創を通して、普段では直接学ぶことの出来ない先生方より貴重な教えを学ばせて頂いたことは自身の今後の人生において大変なる財産となりました。心より感謝申し上げます。
自啓共創の学びを通して実践した事を簡単ではございますがご報告させて頂きます。
・先人の功績により今日がある事に感謝する
・日々、自身と向き合い気持ちを整理する
・先人の志があって今があるのであるから、我が志をもって目の前の人に接する事
・先人の教えを学ぶ事に終わりはない
・日本文化を次世代へ継承する（茶道、小唄、空手を毎月実践中）
・積小為大の精神で世の中に役立つ人間に成り、次世代へ繋がる活動として、20 代の方々へ先人の学びを共有させて頂きました。
・地元の高校生 1 年、2 年生に招いて頂き、二宮尊徳さんの学びの授業をさせて頂きました。
今後も引き続き、利他の精神で尽力し続けたいと思います。
最後に自啓共創の先生方、そして共に学んだ同回生の皆様に心より感謝申し上げます。

29. 永井　恒男　　「世界のための日本のこころ」を学んで
（1）　今後どのような世の中にしたいか。そこに日本のこころはどう貢献できるか？
私の Purpose は「世界平和とイノベーション」です。将来、地球環境が少しでも良くなること、それから行き過ぎた資本主義を是正し、公益資本主義が当たり前になる世の中にしたいと考えています。また不要な争いが少しでも減り、人々が平穏に暮らすことが、私が実現に貢献したい世界です。
地球環境問題の解決において日本の文化が貢献することは間違いない。自然に対峙するのではなく、共生するスタンスが基本となる日本文化は世界の規範となるであろう。また日本文化が、芸術においても、言語における自然物の捉え方すら脳科学的にもユニークであることは大変な驚きである。
環境問題の解決には世界各国が一致団結して取り組むことが重要である。この点に関しても、異なる立場を和を持ってアウフヘーベンしうる日本のこころの役割は大きい。権力ある者や多数派に対して迎合するだけでなく、スマートパワーを日本のこころを持つ人々の活躍を願います。

行き過ぎた資本主義から公益資本主義への転換については、澁澤栄一らを手本にして短期志向、機関投資家偏重を抑制する必要がある。これは現在の日本的経営のままで良いというわけではない。経営コンサルタントとしての意見を述べると、成長のためにしっかりとヒトやモノに投資し、忖度が多く、主体性が低い組織カルチャーを変えていくことが重要だと考えている。

（2）　そのために、自分がこれから、または、将来取り組んでみたいこと。

利他心、王道と自己愛、覇道　自己愛の制御と利他心の発露

自然、他者との調和

30. 石川　未来子　　「日本型リベラルアーツ」を地方から共創する

北から南に縦型に広がる島、日本。海に囲まれた島には自然環境の違いがあったため、地域ごとに自然と共生する知恵が育まれ、少しずつ異なる文化を育み、小さな島の中に多様な文化が生まれました。特に島国日本にとって“自然”は畏れ敬うものであり、自然と寄り添った文化が形成されました。文化の発展と衰退には様々な要因が考えられますが、近代化（産業の発展、機械化、自動化、効率が重視される世の中）は一方向（経済成長）の発展を推進し、地域固有の文化が少しずつ衰退していったことが想像されます。

私には、2020 年に起きたコロナ禍は、そのような一方向の発展に警鐘を鳴らしたように感じられました。世界が同時に足踏みをせざる得なくなった禍は、想定外の出来事に直面した時に何をすべきか、課題に向きあう時間を全員に与えました（日本では東日本大震災がその時間を作りましたが、まだ地域に閉じたものでした）。そのような状況で与えられた問い「これから先、どういう世の中にしたいか」。

私は大きな流れから少し離れ、自分の手の届く範囲の社会課題から解決に取り組み、多様な解決策を持つ社会を作ることが大事なのではないかと考えます。社会課題先進国と言われる日本、その日本には早くも社会課題と向き合っている地方があります。実践の場は用意されています。人口減少（少子高齢化）による耕作放棄地、森林荒廃、鳥獣害といった問題と向きあうことは、畏れ敬うべき自然との共生という地球規模の課題解決に繋がっていくでしょう。そして地方にはそれらの課題に向き合ってきた先人の知恵がまだ、うっすらと残されています。地方に入り、先人の知恵を学び、自然の脅威と向きあい、衰退した文化の回復に努めることが「柔軟な行動力＝レジリエンス」を培うことに繋がっていくと考えます。

薩摩藩が「郷中教育」の中で行なっていた「詮議」は、今でいう“未来洞察”の手法とも言えますが、郷中教育では世代を超えて「詮議」していた点が重要な点です。地方に大人も子供も入り、まずは地方の社会課題解決に取り組み、地方から「日本型リベラルアーツ」を共創する動きを推進し、多様性に富んだ日本を取り戻します。そして日本の多様で美しい文化を世界に発信していきたいと考えます。

32. 三宮　若菜　　~今後どのような社会をめざすか~

14 回の話題提供/ディスカッションを通して感じたことは

・自分がエンジニアで、仕事では論理的なことを求められることが多い。その反面、感覚的なことや芸術などにも興味がある。

・相反しているようにも見えるが、その両方に興味を持っていることは自分にとって大きな武器になるかもしれないと感じた。

（1）これからめざすこと

・「調和」をめざす：エンジニアリングと人間の調和→ビジネスの広がり

エンジニアリング：論理力がメイン

人間力：理屈や論理だけでは説明できない「第6感」も含む

感覚的、芸術的、自然、文化を含んだもの

両方を兼ね備えるとビジネスにつながる

・「多様性」を調和につなげる→調和することが日本人は得意であれば、今言われているダイバーシティ（多様性）を受け入れて調和することもできるのではないか

（2）自分が実践すること

①次世代の育成のため

・考える場を提供する、自分で考える時間を作る。言われたことをやるだけでなく、なぜそう考えるのか、それをやる理由は何か。行き詰まったときにはフォローが入れられるような時間・空間づくり

このとき、「否定しない」「補い合う」→「多様性」をうまく使うこと

・上記考えたことを共有する時間と場を提供する。マイナスの部分を一人で解決しなくてもよい。補い合うことで、他のプラスの部分をもらえる。それが「調和」ということ

・本人や周囲の人のいいところを引き出す。課題は解決するけれども、マイナスを0にするという考え方ではなく、今からプラスにするという考え方

※職場では次世代リーダーの育成につなげ、家庭では将来社会を担う人間（少なくとも、自立した大人）を育てることにつながると思っている。

②自分のため

・今はバランス的にエンジニアとしての時間が多い。もっと自然とか芸術に目を向けたい。

・実は自分は集団とかチームワークとかを作るのが苦手であり自己肯定感が低い、典型的な日本人。暗示でもいいから、これでいい、と強引に思うことが必要と感じている。

33. 鈴木　鉄平　　日本のこころをどのようにして若い人材に伝えていくか

１．はじめに

本塾に参画をし、年齢も職業も様々な塾生と毎回意見を交わしてきたことで、以前には全く知識もなかった「日本のこころ」の特長について学ぶことができた。「神道」、「習合」、「畳語」など色々なキーワードがあったが、日本のこころの最大の良いところは「曖昧であること」＝「相手に対する寛容さや心の広さ」＝「調和」ではないかと感じた。日本のこころの良さをどのようにして残していくのか、若い人材に教えていくことができるのかについて考えてみたい。

２．日本のこころ文化継承への課題

日本のこころを残し、継承していく上での大きな課題は以下2点であると考える。

（1）日本人がもっと日本のことを知る必要がある。

自分自身もそうだが、日本のことを知らなければ若い人材に継承していくこともできなければ、周囲にも発信をしていくことはできない。

（2）幼少期の頃からの教育が必要。

社会人になってからの学び直しもあるが、長期的な文化の継承という視点で考えると幼少期からの擦り込み、教育が必要であると考える。

３．人材育成、教育への取組みについて

課題に対して自らが取り組んでいけることは何があるかを考え、大きく分けて以下の 2 分野において一歩ずつ変革の取り組みを行っていきたい。

（1）社内人材育成

管理職として新入社員の教育も担っているが、名刺交換や席次（上座・下座など）等のビジネスマナーや実務的な部分しか教えられていない現状がある。今後は以下 2 点の視野を取込み、日本のこころも持ちつつ自らの頭で考え抜ける自立した人材になることを目指す。

①世のため、人のためという「調和」をキーとした理念を持つ。

利益最重要視ではなく、日本型文化を意識して考動する。

②人間として正しいと思ったことであれば堂々と主張をしていく。

全てオブラートに包むのではなく、必要な事項は意見を伝えられる文化を醸成する。

（2）親としての学びと教育

子供と一緒に日本のことを学ぶことで、自らが良さを発信できるようにしていく。次に挙げる事項をキーポイントとして楽しみながら取り組んでいきたい。

①四季を楽しむ。

日本特有の四季を感じるイベントを通じて、情緒や感性を磨いていく。

②アニメを活用する。

文字ではなく感性、直感に訴える手法を活用していきたい。

４．おわりに

日々の生活、業務において「日本のこころ」を意識し考動をすることで、自らの成長にも繋げていきたい。

34. 河野　晴信

① 自啓共創塾に何を求めて参加したか

企業における人事活動や交流活動を通して、なぜ面接に来る学生はこうも働くことに関して消極的な人間が多いのか、戦前戦後世代の当社創業者の祖父や社員の仕事への積極性がなぜ高いのか、興味を抱き、様々な勉強会を通じて日本が終戦から精神面において完全に立ち直れていない事実に気づきます。中でも「自分に誇り」を抱けないしくみになっている「教育」は変える必要があると思い、主に教育に関する学びを深めるために当塾に参加しました。

② 塾を通して、現段階の私は「日本のこころ」をどうとらえたか

縄文時代からの長い歴史、世界最長である国家の歴史など「時間」という縦糸でつながった「日本」における様々な事象(善悪問わない)やそこに生きた人たちの生き様を振り返って、各個人が自分もそれらのつながりに連なるよう行動したいと思うそれぞれの「こころ」の集まりが「日本のこころ」ではないか、と現段階で思いました。

③ 心に留まった話題(1)「日本人」の感性は「日本語」で育つという説

副教材第 12 章にある「日本語」は「英語」と異なり、言語脳(左脳)で処理され、「日本独特の感性」が育まれる、というのは非常に注目すべきことだと思いました。世間では幼少期からそれはそれは高価な英語教育の教材が充実しており、英語が堪能な国際的に適した人間が理論上では増えているはずです。にも関わらず、日本の英語スキルは世界的にみてレベルが低かったり、経済は海外勢にやりこめられて低調のままだったりといまいちぱっとしません。ですが、この話を聞いたときに「ああ、やっぱりそもそもズレていたんだな」と思いま

した。人間の 10 歳の年齢に至るまでは「感性」が育つための大切な時期で(脳科学的に” 爬虫類脳” 哺乳類脳” の動物的ステージ)、そこを台無しにするような教育がはびこっていたら、現在のような日本になってしまうのは当然だな、と感じた次第です。

④ 心に留まった話題(2)「大和言葉」

同じく、「大和言葉」も要注目だと感じました。「日本綜學」を提唱する林秀臣氏から、副教材第 12 章にもあります、「あ」「い」「う」「え」「お」の自然発生音に意味がある他に、それぞれの「口の形」もその意味とつながっているという話をきいて感動してしまいました。

「あ」→「え」→「い」→「お」→「う」の順で口の開き方が小さくなり、「あ」は開けた、開放的な言葉が多く(明るい、朝、天(ｱﾏ))、「う」は閉じる、閉鎖的な言葉が多い(うつむく、鬱、うずくまる)といったことや、ひらがなすべてがそれぞれ一音で意味を成しているという原始的言語(発声？)を元とする「大和言葉」の存在は必ず次世代に繋いでいかなければならない大切なものの一つだと深く噛み締めました。

⑤ 日本の歴史・言葉を断絶させている「WGIP」による、「自虐史観」からの脱却

陰謀論扱いされがちな GHQ による「WGIP」ですが、アメリカの公文書に記載されていることから事実であり、この悪意に満ちた歴史的転換点を無視したままだと縄文時代から現代まで続く日本の流れが一貫したものでなくなり、そこから生まれる「日本のこころ」を不完全なものにしてしまうと思います。また同じタイミングで「常用漢字」が導入され、「大和言葉」と「漢字」を結び付けた先代の英知やそれを誇りに思う機会が失われていることも忘れてはいけないと思います。例えば「気」は「氣」。「お米とそこから沸き立つ蒸気」を表し、「米」が日本人にとって建国当時からの自然災害に立ち向かう結束力、心体を健全なものに保つ原動力であったことからその漢字を「大和言葉」の「き（きあい・きもち)」に当てはめた発想があったのではと考えると胸が熱くなってしまいました。（※個人の所見です。）

⑥ 私が取り組みたいこと

悲観的に聞こえるかもしれませんが、「日本のこころ」に満ち溢れた優しい世界は我々が生きている間には訪れないと思っています。昭和天皇は終戦後、日本の再建には 300 年かかると仰せられたので私も現在の日本の状況を見て、同じくらいの時を要すると考えます。しかし、そんな中決して腐ることなく、私が取り組んでみたいことは本来の日本人が持ち得ていた「日本のこころ」の基礎となる日本独特の「感性」「思考能力」をもった次世代の育成に注力といった、自分の人生よりさらに先を見据えた活動になりそうです。

他にも、子どもたちの育成には「教育」以外に、親の愛情にあふれた環境を整えることも重要なので、親の精神安堵のためにも「政治」「経済」「食」といった、私自身これまでの関わってこなかったジャンルに学びの手を伸ばすなど、それこそリベラルアーツ的な視点で見識を深めていこうと思います。「政治」も現状の「教育」を変えるためにはどうしても必要な通り道となりました。特に「教育」に関する政策を掲げた新しい政党「参政党」が今月 12 月から本格始動とのことなので注目しつつ、良い政党のようなので必要があれば助力したいと思っています。そもそも政治に関して議論することが和を乱すといった考えや、雇用条件にも制限があるなど政治的におかしいと思える点が数多く放置されていると文を書きながら思いました。

⑦ 最後に

国境を越えた様々な世代の方や、専門知識を持たれた講師陣との交流のきっかけを創ってくださいました自啓共創塾関係者の皆様に深く御礼を申し上げます。また議論を一緒にさせて頂きました塾生の皆様方に対しましても、貴重な意見を聞かせてもらった他、若輩ものの私の意見も親身に聞いて頂きまして感謝申し上げます。振り返れば塾への参加は皆勤でした。楽しく、有意義な時間をどうもありがとうございました。

35. ルンドクヴィスト ニーナ

私は、対立する二つの考えがあるときに、その二つの間にある中間地点に解決策を見出すことが多い。それは自分の多文化な生い立ちや過去の経験の影響が大きいと思っていたが、日本は古来から神仏儒が互いに受け入れ合い、入り交ざった価値観を成していることを本塾で学び、日本の価値観が自分のものの考え方に影響している部分も大きいのだと感じた。

私がもしスウェーデンと日本をそれぞれどんな国か三つの言葉で説明するとすると、日本を表す言葉は気遣い、忠実、努力だと思う。一方でスウェーデンを説明する言葉は、民主主義、平等、ほどほどの三つだ。スウェーデンの特徴は「主義」であるものが多いのに対し、日本に関しては人の在り方を説明する言葉だ。 これまで、日本に主義がないように見えるのは欠点だと考えていたし、それ故この不透明で低成長な時代に日本が飛躍できていないと考えていた。きっとそれは一理あるかもしれないが、もしかすると自分も日本も、対立する主義や理想がぶつかるときにその間でバランスを図ることのできる存在なのかもしれない。そしてそのとき、日本らしさとしての「気遣い」「忠実」「努力」が活きるのかもしれない。

多くの人が信じる強い価値観や主義は、宗教と同じくらい力のあるものだと思う。たとえばスウェーデンでは女性と男性が限りなく平等に近い状態であることが絶対的な理想と考えられる傾向にあり、またその分野で自分たちが最も進んでいるという自負があることから、そのほかの価値観や意見が受け入れられ理解されることが難しいように思う。それほど強い信念があることは素晴らしいことであると同時に、見落としてしまう側面があるのも事実だ。

私たちは、著しいテクノロジーの発達や気候変動などの中を生き、これまで当たり前と思われていた民主主義や資本主義という「主義」も大きく揺れ動く時代にある。そのような激動の世の中において、様々な思想や主義がぶつかり合い、また SNS に助長されて世論の分断と二極化が進んでいる。私は、その分断や対極化をオープンな対話によって少しでも平和で前向きなものとしたいと考える。それができるのが、もしかすると日本であり自分なのかもしれないと考えた。

私が自啓共創塾に参加したのは、自分自身のルーツや価値観を見つめ直すためであった。スウェーデンに移った今、周りと比較して際立つ自分の特徴が以前とはまた異なっており、そのようなタイミングで改めて他の多くの方々と共に「日本らしさ」や「日本のこころ」を捉え直す良い機会になると考えた。日本という大きな単位で国がどうなるべきかと語るのは難しいけれど、自分を日本と重ねることで自分という小さな単位でどうしたいかは考えることができ、それが日本に通ずるものがあるかもしれない。

これからスウェーデンで暮らす中で、外に居るからこそ見えることを発信し共有していきたいと考える。異なる価値観や考えの間に立ち、「気遣い」「忠実」「努力」を忘れずに対話をしていきたい。

36. 二宮　裕一郎　　<u>一七条憲法を教訓に「和の精神」を大事にした生き方を</u>

聖徳太子が制定した十七条憲法は、千年以上経過した現代においても新鮮に感じ、私自身の心に強く響きました。上下関係や礼儀の大切さ、秩序の重視、治世の清廉さや公平さなど、その条文に盛り込まれた言葉や思想は、人間一人ひとりの生き方の規範として実に深く、豊かなものでした。特に第一条で強調する「和」の精神は、大転換期の今、そして多様な社会で生きる中、互いの違いを理解し、受け容れ、調和していく、大切にしたい行動理念ではないかと感じました。

しかし私自身、家庭内や親子交えての対話や議論をすることが極めて少なく、特に子どもの意見には耳を傾け

ず、和の精神とは程遠い状況です。そういった状況を打破するためにもまずはより身近な家族から自由に話し合い、互いを尊重し合う場を作り、その一環として、家族と十七条憲法を読むことからまずは始めていきたいと思います。日頃、参加している勉強会や今回の自啓共創塾でも声に出して読む朗読が大切だと学びました。朗読を続けることで少しでも自然と行動できるようになることを期待したいです。そして家族から職場へと広げ、第一条の「和を以って貴しと爲し忤ふこと無きを宗と爲す」、十七条の「夫れ事は獨り斷むべからず必ず衆と與に論ふべし」を特に意識しながら日々の社会生活に取り組んで行きたいと思います。
今回の自啓共創塾で学び、もうひとつ実践したいと思ったことに「発信」があります。ＳＮＳの普及により世界中のあらゆる人々とつながっていくであろう今後、しっかりとした価値観とアイデンティティを持ち、語ることができるリーダーが望まれているといいます。私も少しでも近づけるように、発信すべき内容の充実と語れる習慣を身につける訓練を日々していきたいと思います。そのためには講義の中である先生がおっしゃっていた「自身の仕事を常に日本そして社会の課題と結びつけて考え、文章として書いてみる。そして文字化することで、茫漠とした思いが論理的に整理される」という行動を少しずつでも実践していきたいです。
日本のこころ、そして日本国の成り立ちの原点ともいえる十七条憲法。この十七条憲法を行動理念に、「和の精神」と「利他の精神」を大切にしてこれからの社会に貢献していける日本人になっていきたいと思います。

37. 大森　槇人

世界に向けて日本のこころを伝え、存在感を高めるには積極的な発信が欠かせない。今後の世界はネット、AIなどの進化、そして更に新しい技術やツールの誕生で、世界中の人々との距離は縮まり、今まで交流を持つ事の無かった、難しかった様々な国、文化、人種、言語の人々との交流が確実に増えると考えるに足る技術の進歩がここ数年で押し寄せて来ている。特にこのコロナ禍でオンライン=バーチャルでもかなりのコミュニケーションが取れる事が認知され、浸透した事はコロナ禍という困難の中でのポジティブな面として評価出来ると思う。
そんな新たな次元での世界の人々との交流手段が急速に広まる中で、日本のこころ、日本らしさ、日本の良さを発信していく事は日本人としては重要であり、また世界の人々がそれらを知る事は新たな視点、気付き、閃きの素となる可能性を秘めており、日本のこころについて積極的な発言、発信が継続的になされる事を切に願う。
ただし日本のこころを考える時にも言える事であるが、何事にも表裏があり、表裏二面を常に隔たらず考え、世界に向け発信する事が重要であり、良い面、悪い面どちらからも学ぶ事が人々への新たな気付きとなるはずである。
日本のこころの芯となる良い面としては、自啓共創塾で多くの意見が交わされたように様々な面があるが、ひとつ特筆した点として挙げるとすると、やはり日本独特の他社・他方からの考えを独自に取り込み反芻して、融合・進化させる思考を強く持ち合わせている点である。宗教、文化、言語、技術などを取込み融合させる考え方、柔軟性は独特であり、この思考性は今も世界で絶えず起きている宗教、人種などの違いに起因する争いを根本的に変える可能性も秘めている。
一方、沈黙を美徳と捉える古来の日本的な考え方は改めるべき点と考える。 村や組織での集団の輪、まとまりを安定させることを是としてきた歴史から自らの考えを押し殺す風潮は、日本の社会ではまだ抜けきっておらず、この点は改めていく必要があり、日本のこころを世界へ発信していくには自らの考え、想いを積極的に伝え、広めていく事が欠かせない。

自分も積極的に発言、発信が得意な人間ではないが、この点を変えていく事を意識し、身近な日本らしい考えや思いを発信していく事が、世界の中での日本の存在感を高め、日本のこころを伝える事が出来る事だと考える。

38. 本木　静香

第 4 回の儒教の日本化―伊藤仁斎を中心に　土田健次郎早稲田大学名誉教授の資料に「朱子学や陽明学は自力で聖人になることを目指す思想である。しかし仁斎は個人の能力には限界があるとし、世間の中で世間と協調しながら道の理解と実現を図った。世間を重視する日本的性格がここに現れている。この世間重視とは現状肯定ではない、世間とともに世間を刷新していこうという思想である。」という言葉がありました。

日本人は個々人の個性や能力を追求しようとするのではなく、集団で組織力で戦うことを得意とする民族特性があるようにも思います。スポーツなどを見ていてもそのように感じます。

しかしこの考え方が危険なのだと思います。

個人の幸福より組織がうまく回ることを第一に考えてしまうからです。

個々人の顔が見えないので、人権等への配慮も怠りがちになります。

コロナの第 5 波の時も病院という組織を維持することに重きを置きすぎて、自宅療養で亡くなる方を結果として増やしてしまったのではないか？とも思います。

一億総中流といっていたが、それが維持できなくなるとみんなで貧しくなる道を選ぶという選択をしているのもやはり、個人より集団を優先する思考が働いていると思います。

もう一度仁斎の言葉に戻ると　「仁斎は個人の能力には限界があるとし、世間の中で世間と協調しながら道の理解と実現を図った。」

個人の能力は限界があるからといって努力を怠り、既得権を維持することばかりに目を向け、出る杭を打つような行動をしていては日本は先細る一方です。

個人が限界まで努力することが前提でそのうえで世間と協調し、世間を刷新する道を選択することが個々人に求められると思います。

39. 手塚　千尋

私はこれから先の社会に三方良しの考え方を再度広めていきたいと考えています。バブル経済を 経験した日本は国際社会での競争を意識しすぎ、利益主義に走りすぎる傾向にあります。

企業は PR としての表面的な社会貢献を語るのではなく、社会貢献あっての自社の利益であることを再認識することで社会全体が良くなると思います。

私はまだ若年社員ではありますが、サラリーマンとして社会の一員ですので三方良しの気概を 持って営業活動をしたいと考えていますし、いずれ管理職年次になった際には自啓共創塾で学ん だ二宮尊徳や松下幸之助の思想を会社経営に生かしたいと思います。

40. 石坂　雅宏　　<u>「日本のこころ」を自分の言葉でいかに伝えるか</u>

■家族や海外の友人に分かり易く伝える

・このテーマは自啓共創塾に参加したいと思った原動力になります。

外国の友人知人から日本人の「おもてなし」「もったいない」「礼儀正しさ」等について問われる機会に、分か

り易く自分の言葉で語る。
・人に話す際には、キーワードを思い浮かべながら言語化していく必要がある為、自啓共創塾の学びにおいて、自分の心に響いた内容（キーワード）とその理解を下記に列挙します。
・各内容（キーワード）はどれも、日本独特の考え方や文化伝統であることを改めて認識するとともに、キーワードを見ると塾生同士のダイアログでの会話や気付きが想起されます。
・自分の家族や友人知人へ「日本のこころ」を伝えていくということは、とても小さな取り組み、かつ自信を持って語れるまでには、自分の理解度も上げていく必要があります。しかし、たった一人でも伝える事が出来れば、きっとその人から次の人へ伝わる事があり得ると思います。
・「日本のこころ」が少しでも様々な人々に認識されれば、紛争、飢餓、弾圧を解消していくきっかけになっていくのではないか、と感じます。
■「日本のこころ」が縄文時代から受け継がれていることの「キーワード」
＜日本人の DNA＞
　「縄文時代」　１万 6 千年以上前から１万年以上継続
「現代日本人の 12～15%は縄文時代の DNA が残存」
「環境適応力」「復元力」「日本化力」　縄文時代に形成された日本人の三つの力
　「神仏儒の習合」　「和」
＜生活＞
日本国土が海に囲まれている為、他国との大きな争い事が少ない。　「もったいない」　必要な物を必要な分だけ取り入れる　「物づくりの精神」使い勝手が良く、手入れする事により長持ちする
＜日本語＞
「大和言葉」　縄文時代に育まれた日本のこころの源流　　「タタミゼ」　日本語を話す外国人は皆優しい気持ちになる
＜自然と人間の関係性＞
日本：「自然＝人間、一体不可分」「自然中心」「あいまいさの許容」
　欧米：「自然＜人間、人間が上位」「人間中心」「理論的」
＜価値観、概念＞
　「調和」「おもいやり」「おかげさま」「おたがいさま」
「武士道」勝ち負けではない、自分と向き合う、相手と対峙する、海外への展開
「マンガ・アニメの奥深さ」「剣道にガッツポーズはない」「SDGS 全１７項目を包含」

41. 富田　真司　　<u>人口減少社会に立ち向かう「日本のこころ」について</u>
<u>○課　題</u>
・日本はまさに約１億 2,618 万人から１億 2,500 万人と人口が減少しており「人口減少時代」に挑戦をしていくことになります。
・私が住む岐阜県の人口も３５年ぶりに 200 万人を割り込み、人口減少はさらに加速化している状況にあり、今後１０年で毎年１万６千人減少しています。
<u>○人口減少に伴う影響</u>
・地域や経済の担い手である、いわゆる生産年齢人口の減少が顕著であり、産業、医療、教育、企業、ＮＰＯ

など衰退が進んでいます。
・特に、健やかで安らかな地域づくりを担う、医師確保などの医療サービスの提供の確保は必須であります。
・私は、人口減少が進み、社会が縮小していく中にあっては、地域の魅力発信、活力を生み出してく取組みが必要であるし、日本の各地域に根づく四季折々の自然、文化、地域資源を見つめ直すことでふるさと回帰（地方創生）につなげることが改めて重要だと感じています。
〇現在の日本の特徴とは
・人口減少社会に立ち向かうためには、日本の特徴やこれまでの歩みをしっかりと認識する必要があります。まず、日本の歴史を振り返ると、古代より日本は島国であり、江戸時代には鎖国が行われてきたことから異なる価値観に不寛容、排他的な考えがあると思います。
・その風土や歴史から多くの日本人は基本的には保守的な考えが多く、変化することに慎重である一方で、集団性が強く、ながされやすい性格もあります。
・ここで着目すべきは、日本人は自らの良い部分を認識し、「過去の良き部分」を着実に残していける特徴があるという点です。
身近な例としても、年中行事も絶やさず継続的に行い祖先へ思いを馳せ、御祈りをし、伝統芸能や文化の体験や発信も行われています。
・しかしながら、近年の日本は、国際化や多様性の拡がりを受けることに合わせて家族の形態の核家族化や地域コミュニティの希薄化があり、地域文化に気軽に触れることができにくくなっています。ひいては、自国の文化を学習したり、体感したり、発信したりする場が減少している課題があり、ふるさとを見つめ直す機会が減少していると感じています。
〇「日本のこころ」を活かした課題解決
・さて、人口減少社会に立ち向かうために、これまで培われてきた「日本のこころ」をどう発露していくことが必要なのか自考を深めました。
・日本のこころには多様な視点があると思いますが、私は、日本人の根本的な特徴を支えている自然、文化など「地域の絆、ふるさとへの愛着の醸成」が人口減少社会の解決の糸口になると考えています。
・日本のこころの源流は日本独特の風土で培われた自然観と家族を基本とした教育から生み出されていることを踏まえると、幼い頃から自然、歴史、伝統、文化、技などふるさとが織りなす知恵を知り学ぶことが大切であり、リベラルアーツのような対話と体験を全身で感じ取っていくことで活路が生まれると感じています。
・それは、ふるさとの宝ものを磨き活かすことにつながり、新たな創造を生み出し、後世に伝えていく契機になると考えています。
・そのため、日本のこころを全身で肚落ちさせる「教育」こそ重要であると思います。そのために私は、「体験学習倍増計画」を提案したいです。
・体験学習により海、山といった自然の偉大さを体験し、地元の神社やお寺と宗教とのつながりを学ぶことを学習する内容は地域の文化や伝統、歴史、自然などふるさと教育を推進することで新たな海外からの影響も俯瞰的にとらえ、見極めた上で、自国に取り入れることができるようになると思います。
・これからの日本に求められるのは、明治維新の立役者や戦後の日本の成長を支えた方のように「転換する力」を持った人材です。まさに、一つの答えにこだわらない感受性豊かな多様な人材です。
・体験学習を増やすことは、幼少期よりインプット形式の授業ではなく、アウトプットを豊かにすることで多様な感受性を育むようなると思います。

○今後について

・ふるさと愛の発露が「絆」のある地域社会を構築し、互いの文化や考え方を尊重できる社会に導いてくれると思います。

・こうした取組みを進めていくことで、「人」と「地域」が密着し、コミュニティを充実し、地方創生に寄与すると思います。

42. 田村　高顕　　「これからの世界・社会に立ち向かう日本の夢（ビジョン）」

「The Best Way to Predict the Future is to Invent IT.」

「未来を予測する最良の方法は、それを発明することである。」という、アラン・ケイの言葉の通り、「これからの世界・社会」を待つのではなく、私たちには、それをより良いものとして発明する責任があります。その実現に向けて、

①まず、自らが、どのような「未来」にしたいのかを描き、

②「リスク＝変動要素」の的確な把握と対策の検討に努め、

③多様な強みを掛け合わせ、課題の解決と、より良い未来づくりを推進する、

というステップを具体的に実行することに努めています。

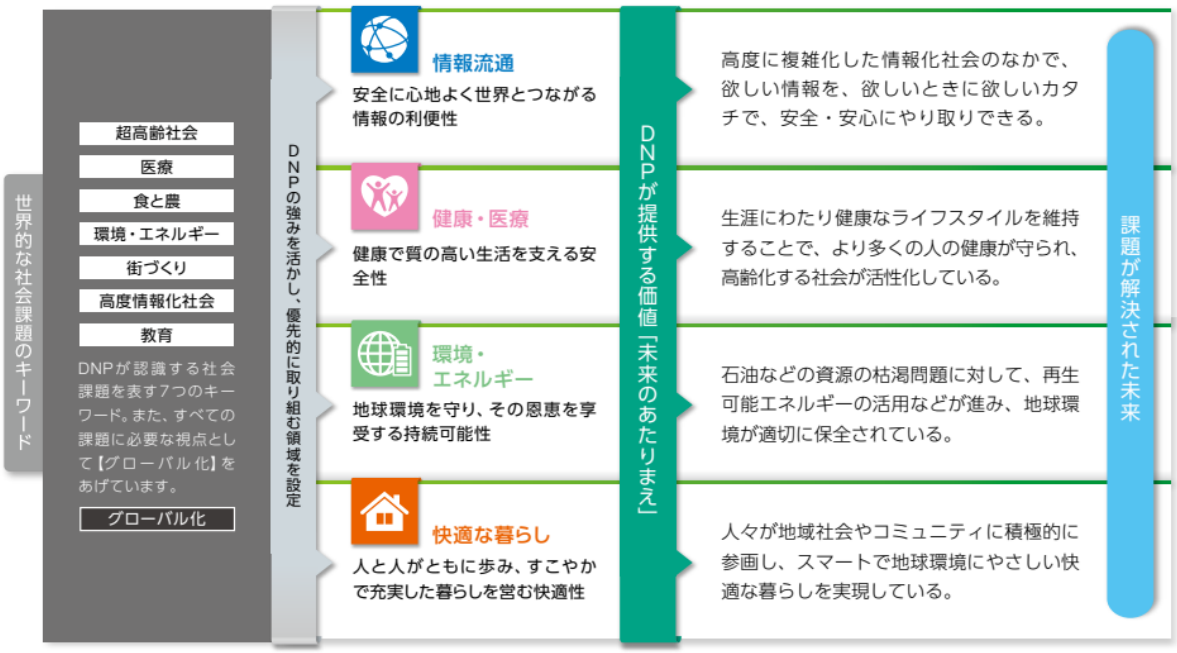
最初に「世界共通の夢」として、百年後・千年後の健やかな地球の姿を描き出すことがとても重要だと思います。その時代には、国や地域の境い目や格差も無くしていきたいですし、その中で「日本の夢」「A さんの夢」「B さんの夢」を実現できるように、そのための第一歩を現時点で踏み出したいと考えます。

特に「多様な強み」については、日本の強みを明確化するとともに、世界中の人々の知恵を尊重し、個々の強みを連動させることが不可欠だと考えます。

西洋文明の長所・短所が明らかになるなか、少数民族の中にこそ地球を持続可能なものにして次世代に受け渡す知恵が育まれていると思います。

そこに日本ならではの強みを掛け合わせることで、「これからの世界・社会」をより良いものにしていく「価値」をつくり出せるように努めていきます。

■例：全体課題の見極め→自分とパートナーの強みで解決できる課題の抽出→具体的なアプローチ



43. 叶松 忍　　「Heal the World Project」

私が大好きな曲の一つに、マイケルジャクソンの「Heal the world」という曲があります。この曲を聴くと、いつも心が癒されて、魂が何かと共鳴する感覚を覚えます。「Heal the world」を直訳すると「世界を癒そう」ですが、歌詞の内容は、「争いで傷ついたこの世界を、人々の愛で癒していこう」「小さなことでいいから、私たちが住んでいるこの世界を、より良い場所にしていこう」といった内容です。

私がこれから創っていきたいのは、まさに、「Heal the world」のような、誰もが人と比べることなく、ワクワクしながら、自分らしく楽しく生きていける世界、人と「競争」するのではなく、仲間と一緒により良い未来を「共創」できる世界です。

日本人は、自然との共生や人間同士の「和」を重んじる精神性を持ち、「もったいない」「おかげさま」「おたがいさま」といった SDGs にも通じる考えや振る舞いを自然体で兼ね備えていることから、これからの世界を整えて癒していく＝持続可能で平和な世界を創っていくためには、日本のこころが必須であると強く感じています。

私は、広島で生まれ育ちました。世界で最初の被爆地であり、そこからの復興という歴史を持つ広島の地に、リアル・オンライン問わず、世界中の人たちが集い、より良い未来を共創したくなるような「遊び場／Play Space」を創りたいと思っています。

そこを訪れる人たちは、広島の歴史・文化はもとより、温かい人や豊かな自然に触れ、多様な人々との対話を通して、自身の生き方・在り方を見つめ直します。そして、人間が本来持つ真我（魂）の響きに従い、自分らしく生きていくことで、自然に、争いのない、より良い未来を創りたいといった気持ちになれる場所を創ります。

その第一歩として、今年度、広島の仲間と共に、Peace Culture Academy を立ち上げました。「自分を知り、世界を変える！」を合言葉に、とことん自分に向き合い、「平和×〇〇」という自分が描くオリジナルの平和文化の実践を通して、持続可能で平和な世界を共創する「ピースリーダー」の育成を目指すオンラインスクールです。

このスクールの生徒や卒業生たちの力も借りながら、全国、全世界の若者の力を結集して、より良い未来をみんなで共創していく、そのための環境づくりを仲間とともに実践して参ります。

44. 北出　健人　　この集まりに参加して

実はこの本を最初に読んだ後は、はて日本型リベラルアーツってなんなのかと、全く理解が出来ていませんでした。

ですが、15 章の話を聞いているうちに、自分なりにですが、日本型リベラルアーツを学び、理解することが出来るようになりました。

これから自分も、優しさや共生など日本のこころを大切にしていきたいと思います。

46. 明日見　和佳

自啓共創塾では、毎回新しい気づきを得ることができました。様々な年代の方と意見交換ができたのが特に貴重な機会でした。

48. Ｈ．Ｓ
今回の活動は日本のこころというあまり触れることのないテーマを多視点的に捉えるきっかけになりました。また、改めて日本のこころに正対することによってより日本人としてのアイデンティティが形成されていきました。ただ日本のこころを学ぶことが目標なのではなく、学んでから何をするか考えるための手段のようなものだと思います。日本人として育ち、日本のこころを持つ私はより一層日本のこころを洗練させ、高めていきたいです。また、それをどう周りに伝播させていけばいいのか、後世に伝えていけばいいのか考えていきます。そして、自分なりにではありますが行動に起こしていきます。

49. 依田　晴菜　　「歌舞伎の魅力を国内外の人に伝える！」
→歌舞伎のＮＰＯ法人を設立

体験型イベントを出張型で開催
↓
歌舞伎を楽しく体験
↓
もっと歌舞伎をやってみたい！　→　歌舞伎教室に
若者に馴染みが少ない歌舞伎を工夫して親しみやすくしていきたいです。

50. 山脇　千稔
１．「日本型リベラルアーツ」についての理解
　自啓共創塾での学習や対話を通じて、「日本型リベラルアーツ」とは、八百万の神（not 唯一神）、習合（優れた要素を融合）、和・一円観（相互尊重・相互理解）といった日本の多元主義的思想に基づいて、事象を把握・理解し、課題を解決していく技法と捉えた。
　むやみに対立を生むのではなく、相互尊重・相互尊重の上で対話を重ねて、よりよい（お互いが活きる）解決策を探求する志向・技術と理解した。
弁証法（正・反・合）と類似とも思われるが、日本型リベラルアーツは単なる論理ではなく、その根底には、自然崇敬（神道的要素）、他者との調和（仏教的要素）、礼節（儒教、武士道的要素）といった精神性・美意識に裏打ちされ、こうした精神性が判断・決断の軸・拠り所になるものと考えた。
２．実現すべき世の中・そのための日本のこころの貢献
　現代世界は、移動技術・通信技術の発展により、メッセージ（文字・声・映像）が瞬時に届く、移動も高速化、攻撃手段さえも。人間の活動に比して地球が相対的に狭くなったとも言える。また、人間の活動の活性化に伴って時代の変化は加速化している（ＶＵＣＡの時代）。
　この状況は、地球の日本化（島国化）とも捉えられ、狭い日本で環境変化（四季・災害）に対応しつつ人々が平穏に共存するための知恵として形成されてきた「日本のこころ」が機能しうると考える。
このことから、世界のグローバルリーダーをはじめ多くの人々に日本型リベラルアーツを共通の知恵として実践してもらうことにより、地球規模で調和と発展を両立する社会を実現することが望まれる。そのためには、日本型リベラルアーツについて発信することが必要と考える。
　ただ、世界に向けて発信する際には、他者・他文化への敬意が疎かになると理解は得られないし、「日本の

こころ」にも沿わない言動となってしまうことを危惧する。

「日本文化は優れている」（劣後する文化があることを想起させる）や「日本文化は世界一」といった発信は控えるべきと考える。「日本型リベラルアーツ」についても「日本から発信するグローバル・リベラルアーツ」といった呼称の方が理解を得られやすいのではないかと考える。

３．自分がこれから取り組むこと

自分の現在の立ち位置から世界に向けた「日本型リベラルアーツ」の発信はリアリティを欠いて感じられる。このことはより志が強く、将来が開けた人物に期待したい。

現実的に、ひとりの「日本のこころ」を持っている（と思いたい）人間としてできることとして、次のことを心がけていきたい。

① 仕事上、私生活上で判断・決断する際に、自分の中の「日本のこころ」と照らし合わせること。

② 日本の文化をよりよく知ろうとすること。「日本のこころ」とのつながりに思いを巡らせること。

③ 他者尊重、相互理解、許容の姿勢をもつこと。他国の文化や背景についても知ろうとすること。

④ こうした姿勢を周囲の人に示し続けること。

51. N　S

歴史上、戦争のなかった時代は長くない。戦争のない世界があればよいと思う。そのような世界になることが現実的かどうかはわからないが、みんながそれを希求する価値観は共有できないかと考える。

意見の相違は必ず生じるため、調整が整わないことは起こる。自己の権利等を侵害されて防衛手段としての争いも発生する。様々な状況で、常に世界には凸凹が生じ、それを解消する動きはある。自己の主張を通せないことには、自己が認識できていない何かがあるからだ、と解決手段として、戦争という点に達する前に、立ち止まることができないかと考えている。

そのときに、「日本のこころ」が世界に貢献できるひとつのものかもしれないと思う。

本塾で学んできたなかで、「日本のこころ」とは何かを考えるときに、一番象徴的であると考えたのは、神仏儒の習合である。多くの日本人が、特定の宗教を持たない無宗教であると考えていること、これが日本人のもつ世界観の基礎になっていると感じた。無宗教であると考えつつも、その根底には共通した感覚が流れており、それが神仏儒の習合であろう。

神道には、人間にはどうすることもできない自然環境に対する畏敬の念がある。人間は自然と対峙するものではなく、その一部であり、自然は合理的な理解や解釈の対象ではないと考えている。人間がすべてを掌握することはできないという姿勢が、他の宗教の存在を包摂する、神仏儒の習合の土台になったのではないか。

このことは、ほかにも日本語は、その特徴として、状況認識が先で、自己認識が後であることを学んだが、これも、人間がすべてを掌握できないという姿勢が影響しているようにも感じられる。

このような謙虚ともいえる姿勢が「日本のこころ」が発露しているひとつの例だと思う。

この「日本のこころ」の価値観が広がることで、戦争のない世界の実現に近づくのではないかと思う。

では、「日本のこころ」の理解を広げるために私ができることとは何か。

「日本のこころ」を形作る様々な要素を、自分自身でもっと深く理解しないといけないと痛感している。この理解こそがリベラルアーツの修得であると思う。多面的な視点、大局観をつけ、深く自分の源流と、世界から見た日本の価値に自覚的になりたい。そして様々な人との対話の中で、まわりに刺激を与えられる存在になれれば、戦争のない世界へほんの少しだが前進できるのだと思う。

52. 鈴木　勝博

産業革命以降、規模の経済の追求と資本主義が拡大がグローバル化し、世界中で工業・商業・都市化が急速に発展してきた。特に近年の都市部に限っては先進国と新興国を比較しても優劣をつけがたいほどである。
ものづくりはその世界の成長をけん引してきた業界の一つである。人類はものを開発しものに満たされていくことを、自分たちが豊かになることとした。その裏でものづくり業界は常にグローバルなコスト競争にさらされて、改善による改善を重ねてコストダウンにしのぎを削ってきた。しかし昨今、自分が身を投じているものづくり業界の行く末に不安を覚える。非常にビジネスライクに傾きすぎて、ついには品質よりコストを重要視する風潮がみられる。価格と要求品質の乖離が激しすぎて、ものづくりの魂を持って赤字を覚悟するか、ポリシーは捨て去って品質を妥協するかの選択を迫られる。このような状況でものづくり業界がプライドを持ってものづくりに励むことは難しいと感じる。
私は今の極端な株主資本主義から、いち早く公益資本主義へと社会全体の価値観が変わらなければならないと思う。確かに自動化・DX 化・AI 化の社会実装が進めばロボットだけでものづくりできる可能性も高まるが、すべて完全に人の手を加えないようにするには技術的に困難で、お金もかかり、妥協点も数多く出てくるだろう。そして残された人の仕事は超難易度の高いものばかりとなる。日本ではいずれの業種においても大半が中小企業以下の規模だ。大手ばかりがいくら DX 化を進めても中小企業で進まなければ産業の衰退は避けられない。大手・中小・個人という枠組みを超えて、業界や日本全体でどのようにものづくりを成り立たせていくか考えなければならない。そしてその議論に利他主義や調和のこころが無ければ、話はいっこうにまとまらないであろう。

私の会社は金型をつくっている。そして金型の修理・改造・メンテが得意である。この技術を活かすことで多くの金型をリユースすることができる。私は今後の脱炭素社会への対応策として、この技術を積極的に展開していこうと考えている。「とにかく高品質な新品を安く早くつくれ」という世界感から脱却して、直して使えるものは再利用し品質は調整しながら高めていく方針で行きたい。また私は今の時代はもう精神論は通用しないと考えていたが、この塾の学びを通じて日本のこころがやはり日本のものづくりの精神にも生きていると再確認した。そのため国籍を問わず、もっと積極的に日本の精神について会社のスタッフと対話していきたいと思うようになった。「ものには魂が宿る」という言葉があるが、私もそのような精神やプライドを失いたくないと思っている。そして世界中の数多くの製造業者がビジネスライクではなく、職人魂のこもった仕事をして欲しいと願っている。

伴走者レポート

以下は、オブザーバー、アドバイザー、塾長、塾頭、事務局員など、塾生の伴走者として共に学んだ伴走者のレポートです。

小山　邦彦

オブザーバーとして数回、参加をさせていただきましたが、受講メンバーの知見と視座の高さに感じ入りました。当塾がこのようなメンバーが続々と集って互いに錬磨する場になれば、素晴らしいことが起きるのではないかと期待されます。

さて、この塾は学びや対話を中心に行ってきましたが、「古の道を聞きて唱えても我が行いにせねば甲斐なし」と云われるように、学んだ後にどのような活動をしていくかが課題となります。特に「世界に貢献するために本来的に日本人が持つ特性をどう活かすか」というテーマは遠大で、未だこの特性を確かなものとして認識・定義するまでには至っていないと感じています。さらにはそれを認識した後、独り善がりにならず、どのようにして世界へ発信・関与するかも挑戦し甲斐のある課題です。よって、次のステップ（アドヴァンス？）では、この特性をさらに深く探究する場があってはどうかと考えます。ただしこの場合、歴史から見るに日本人の強みだけでなく、その弱みも知り、かつ諸外国の他民族の特性（強み・弱み）も知ったうえで、日本人独自の強みを再認識する場があると、さらに深い学びが得られ、各自の立志に至ることも期待できます。日本人は世界的に稀な地勢、民族史と霊性を有しているのは確かであり、共生文明、高徳社会、公益経済を世界に向けて発信できる力量と責務があると信じております。今後の皆様のご活躍を期待しております。

川崎　一彦

自啓共創塾のコンテンツ、メッセージは本当に素晴らしいですね。

そして「共創」という表現から、①「より良い世界を共創する」、②塾の参加者、話題提供者、ステークホルダーによる共創、への期待が高まります。

9 月の塾生アンケート結果によれば「未来に向けて取り組んで行きたいテーマ」が少なくとも 8 つ挙げられたとのこと、ぜひ共創により具体的アクションまたはプロトタイプに繋いでほしいものです。

塾生さんの共創のための意見交換の場についてのご提案があります。

「議論が尽きない」とのコメントもあり、放課後タイムも評価されたとのことですが、何らかの形の塾生のオンラインの「ディスカッションフォーラム」があれば、隔週の塾の時間外でも一層共創に向けての意見交換が容易で活発になるのではないか、と考えます。一期生だけではなく、来年以降もどんどん共創が拡大するでしょう。

山口　秀範

最終回のグループ討議で、ＡＩが人間を超える時代が来るかという話題になったが、参加者はそれぞれ「自分の意思をＡＩに任せたくない」、「正しいと思ってもわざと従わないかもしれない」と発言した。実に興味深い内容でしかもとても頼もしく感じた。

ことはＡＩと人間のせめぎ合いのみに留まらない。かつて（日米開戦の直前ころ）小林秀雄が「歴史と文学」の冒頭に「いつの時代にも、その時代の思想界を宰領し・・偶像視されている言葉がある」と書いて、その言葉はかつては神・天などであったが、現代(当時)では歴史(歴史観)であろうと言っている。マルクス史観が既に

学者や官僚の間で支配的であった世相を反映したものであろう。

さしずめ今日では「平和」か「人権」がそれに当たるのであろうか。一旦偶像視されると誰も逆らうことが出来なくなるという「空気」は、現代日本をも容易に支配する。一人ひとりが自分の目でものを見て、正しく判断する見識が愈々求められている。「日本型リベラルアーツ」を身につけることが日本を正し、世界を救う大きな力になると期待している。

藤田　英樹

「少子高齢化・人口減少・労働力人口減少」、「経済成長の低迷と公的債務の膨張」、「周辺諸国との地政学的かつ政治体制的緊張の持続」、「日本・日本人のアイデンティティや文化・伝統をどう継承し、また発揮していくか」の４つが、現在の日本が抱える最大かつ喫緊の課題と考える。私たちは、この中の４つ目のテーマに直結する問題意識のもと、日本のこころの源流を探り、未来に向けて何をなすべきかを考えてきたのだと思う。

同時に、日本のこころを学び、日本型リベラルアーツについて理解し、次世代へのその分野の教育や理解の拡張、実践を進めていくことにより、他の３つの課題の緩和や克服や変化へのきっかけにもなりうると考える。すなわち、我々の活動は、我々のためではなく、次世代、次々世代、将来にわたる日本のプレゼンスや平和・繁栄・幸福につながるものであり、更に、世界の平和・繁栄・幸福につながるものだと信じている。

私は、その中で、特に、日本の縄文・古代・中世と、現在日本をつなぎ、日本のこころ、日本の文化、日本の伝統を形成する画期的な時代となった「江戸時代の実像・役割・意味」の研究を更に継続・解明していく覚悟でいるのと、不幸な戦争をこれからの人類史に刻むことがないように、「戦争と人間」についての研究も重ねていきたいと考える。そしてその研究の内実や成果を多くの人と共有したり、学び合いを継続していきたい。

また、私たちの自啓共創塾の学びは、まさに「継続こそが力なり」であり、多様なバックグラウンドや考え方を持った様々な世代の多くの人、とりわけ先ほどの主旨のとおり、これからの地球を担っていく人々との交流や意見交換や学び・対話の場の提供が大切であると考える。

それは、日本人だけでなく、日系人、留学生、日本で働く外国人など、まず私たちにできる範囲で、その対象や枠組みを拡げていくことが求められており、私自身もそのような試みに参画し、貢献していきたい。

島岡　恵

自啓共創塾の皆さんのグループセッションにオブザーバーで参加させていただき、世代を越えた意見交換の持つ「力」を感じました。
異業種交流というものも、自分とは違う文化で生きている人々と出会う場になりますが、
世代を越えた交流の価値は、それ以上のものだと思いました。
組織、個人、それぞれに思い込みや固定概念のようなものははびこりがちですが、
世代による固定概念も大きいなと感じた次第です。
私にとっては、若い世代の声をきけたのが、楽しかったです。
そして、若い世代がセッションに参加することで、周りの大人たちも活気づいていくのが伝わっていきました。
これからも、塾に限らず、世代を越えて率直に意見を交換し合える場があるといいな、と思います。これからの未来、間違いなく社会の主役は、今の若者たちにバトンタッチされていくわけですから。

天野　定功

コロナ禍の中で８か月間自啓共創塾で共に学びながら、ますます「日本のこころ」を世界のために役立てるための日本型リベラルアーツ教育の必要性を痛感しました。
国土が狭く資源エネルギーに乏しい我が国が世界に貢献できる道は、人間のさまざまの活動分野で世界をリードできる優れた人材、人物を輩出して人類の平和的な共存・繁栄を確かなものとすることしかありません。
日本型リベラルアーツが公教育の場で取り上げられるにはまだ相当な時間がかかります。当面は、自啓共創塾と「日本のこころ」を体現する文化の推進活動をしている民間団体（私塾など）と連携のネットワークを組み、また日本型リベラルアーツ教育に賛同する超党派議連の立ち上げなどによりリベラルアーツ教育に対する国内世論の高まり図る。
次に、川崎一彦先生の提案されるように
①　我が国の若い人や外国人に「日本のこころ」を体験・実習できる施設を設ける。
②　スウェーデンのようなブランドの高い国々の中で SDGs のような世界共通目標の実現に取り組んでいる団体とコラボを図る。
さらに渥美郁子先生の提唱される「世界共通教育」を国連の取り組み目標にすべく上記②の国際団体と連携を図り国際世論を形成する。
　このように段階的に運動を高め、世界的に認められる日本型リベラルアーツを構築していくことが肝心かと思います。

井上　淳也　　「自啓共創塾で学んで今思うこと」
日本のこころを勉強するのはとても愉しいことです。これまで知らなかったことや、そこまで深くは理解していなかったことがだんだんと分かってくるからです。そうすると、いろいろなことが繋がってきて、さらにその奥に分け入ることができます。そしてそれは、育った国や文化といった自分の根源に関わることなのですから、誇りや自信につながるという心地よさもあります。
ところで、自啓共創塾は「自調自考」がモットーですが、その先には自分で行動する「自行」があると思っています。そうでなければ、ただ自分で考えているだけ、もしくは、ただ言っているだけの評論家になってしまいます。それはただの自己満足であり、そこで得た誇りや自信も虎の威を借りただけにしか過ぎないのではないかと思うのです。でもじゃあ自分は何らかの行動を起こせているのか。そんな疑問がどうしても湧いてくるのです。
そうですね。日本のこころを勉強する目的は既に掲げられています。世界のための日本のこころです。世界のため、世界のため、自分は世界のためになにかしているのか。
20 代のころは、世界をまたにかけて仕事をしたいという希望、いや、野心を持っていました。英語も勉強し留学もしました。海外で仕事をしたいと思っていました。しかし２年ほど国際フォーラムの仕事をした以外は、結局ずっと国内の仕事をしてここまで来てしまったのです。さて、今から世界のために何ができるのだろうかと考えてしまうわけです。
世界のために貢献するというと、そのイメージは国連のような国際機関で活躍したり、国際会議のメンバーになって議論をリードしたりといった感じがします。日本人の世界的なリーダーが少ないと言われている分野かもしれません。このような場で世界的なビジョンを示したり、方針を作ったり、ルールを整備することはとても大事です。
ただ、会社でもなんでも、社長や幹部がビジョンを示すだけでは物事は進みません。トップダウンと同時にボ

トムアップも重要なのです。では一体、より良い世界を作るボトムアップとは何でしょうか。私はそれが、地方創生だと思っているのです。そこに住む人たちが、自ら自分たちの地域を運営し豊かで笑顔のある幸せな共同体を作ることができれば、世界の人たちが真似をしたくなるモデルになるはずです。そういう地域社会を創ることが、世界へのボトムアップでの貢献になるはずです。世界から注目されれば、その地域のリーダーがいきなり世界の会議にデビューするということも可能です。ボトムアップが、トップと直接つながる瞬間です。国より小さな単位の地域が世界的につながり、それらが連合する会議の中で日本各地の元気な地域が生き生きとプレゼンするなんていう未来は素敵です。そんな未来を夢見て、地域創生に貢献していきたいなと考えています。

栗原　康剛

「日本人が日本に対する誇りを持ち、自ら行動・コミットする気概を取り戻し、真摯に日本の課題に向き合い、更には世界共通、先行する課題に取り組み、先送りをせず解決の道筋をつけ、次世代に誇りや夢を持てる基盤を引き継ぎ、そして国際社会に貢献し世界から尊敬される国とする」というのが、Japan Pride イニシアチブの志です。

自啓共創塾は、これを実現する取組になるであろうという仮説を持ち、参加させて頂きました。まさにこの仮説が検証された第 1 期だったと思います。

古代ギリシャにルーツを持つリベラルアーツは“自由に生きるための技術”でしたが、現代に求められるリベラルアーツは“幸せに生きるための技術”と考えます。人が幸せに生きるためには、自らの心身を充実する力に加え、進んで他人や社会の役に立つことが大切です。大局的、複眼的な観察力と洞察力、高い志と徳を備え、信頼・尊敬される人間力が求められます。自啓共創塾における皆さまとの対話と学びを通じて、“日本のこころ”にその源流があると確信しました。

現在、Japan Pride イニシアチブの取組を深化させるような構想を思案しています。「リベラルアーツ」と「実践智（現代社会の未解決課題の解決）」を結び付けるようなプログラムを通じて、企業や教育機関等に対して、「人材開発（含、エンゲージメント）」「社会貢献」「経済社会システム再構築」に資する機能を提供する仕組みをイメージしています。第 1 期生やご協力頂いた関係者を含む自啓共創塾の皆さまのお力やビジョンとの連携が必要となりますので、今後とも皆さまとの交流を継続させて頂ければ幸いに存じます。

一木　典子

　ずっと念頭にあった問いは、「日本のこころ」が失われつつあると言われるなかで、「如何にして私自身がそれを体得し、さらに承継させていくことができるか」ということでした。

補助教材、話題提供、そしてみなさまとの対話を通して学ぶ過程で、現代を生きる私たちの中にもしっかりと「日本のこころ」（神仏儒の習合した「和」・「輪」（「円」）・「環」のこころ）が、わずかかも知れませんが、しっかりとあることに気づきます。歴史に疎く、〇道を修めたこともない私でさえ…です。それがとても神秘的で、私たちが普段意識していない中に“承継の秘儀”が存在していることを予感させました。

そういえば……、こどもの頃は母と毎月神社にお参りに行っていた。彼女はちょっとした草花や葉を家の中に飾って楽しんでいた。父からは、共同体の中で自分なりの貢献をすることを、日々の背中で見せてもらった。こどものころはそのあり方が恥ずかしくもあったけど、彼は異端であることを恐れず（同ぜず）自由に生きていたなぁ。祖母はいつも祈っていた。祖父はいつも人の話を聴いていた。ありがたいことがあるとふと手を合

わせる自分がいる。自然の中で活動すると、疲れるどころか気力が湧くし、日々、自然の音に風情を感じ、旬の食材のいのちを頂いている。さらに、「間」を大事にする日本語は常に共にある。好きな音楽に魂が歓ぶ経験から「調和」や「表現」への絶対感度が身についた？
このように、日常の身近な暮らしの中に、「日本のこころ」を体現した、心地よく美しいことば、振る舞い、営みがあることこそ、「日本のこころ」を承継する秘儀なのではないでしょうか。（もちろん、歴史や〇道の学びがあればなおよし。合気道、習いはじめようかな。）
私は、「生活の芸術化」により、「質素であっても生活の魅力を満喫」する、そんなライフスタイルを公私に渡って提案し、一部は自らも実践することで、「日本のこころ」を呼び起こし、個人と社会の主観的ウェルビーイングの向上、地球環境の再生に寄与していきたいと思います。（具体的に今取り組んでいることは、豊かな自然や多様な価値観に触れ、旬を感じる料理を楽しみ、家庭用コンポストで身近な循環をつくるような体験デザインと、日本型リベラルアーツを学び続けながら普及にも関わる活動です。）

根本　英明

地球という生命体の中で、自然と共生しつつ、あらゆる人が輝ける社会を実現したい

人々が物質的豊かさを追い求めた結果、地球上の多くの資源を乱開発し、地球全体に膨大な負荷をかけてきた。ある自然人類学者によれば、現在の地球環境破壊の深刻さは、46 億年の地球史の中でも大きな過渡期に刻まれるほどだという。こうした地球危機を乗り越えるには、どうすればよいか。あらゆる自然に神の存在を感じ、人間も動植物とともに自然の一部であり、自然とともにある「日本のこころ」に、世界永続のヒントがあるように思う。しかしこうした世界観は日本に限られたものではない。北米やアラスカの先住民族の智恵とも共通する、いわば人類普遍の叡知といえる。
歴史を振り返る時、江戸時代はリサイクル、リユースの進んだ循環型社会だった。我々は今一度、この時代を振り返り、そこからも学ぶべきヒントがある。
また現在の日本社会では、生きづらさを抱える子供、若者が数多く存在する（不登校 23 万人、ニート 87 万人）。その原因として、一つのルートに従って生きることを求められがちな社会のあり方や風潮にあるように思う。そこから外れると「困った人」「社会不適応者」と見做されがちだ。しかし、そもそも人はみな異なる個性を持っている。二宮尊徳の思想をわかりやすく表現した「万象具徳」（作：佐々井典比古・報徳記念館初代館長）という詩にはこうある。
「どんなものにもよさがある/どんなひとにもよさがある/よさがそれぞれみなちがう/よさがいっぱいかくれてる/どこかとりえがあるものだ/もののとりえをひきだそう/ひとのとりえをそだてよう/じぶんのとりえをささげよう/とりえとりえがむすばれて/このよはたのしいふえせかい」
※「ふえせかい（増え世界）：さまざまな価値が生まれ増えて、世界が広がること」
一人ひとりが輝くためには多様な生き方が選択できる社会をつくっていくこと。さらにあらゆる人の可能性を信じ、ポジティブコア（核となる潜在力）が引き出されることによって、さまざまな才能が開花する。みんなが輝く希望に満ちた社会が生まれるのではないかと思う。
　これから取り組んでみたいことは次の通りである。
１．「令和日本の国家デザイン」の提言
日本のこころセンターでは一昨年「日本のこころ研究会」を設け、メンバーと議論を重ねて『世界のための日本のこころ』作成に至った。次は「令和日本の国家デザイン研究会」を設け、日本のこころを土台とした日本

の輝ける未来を展望する提言を発信することを行ってみたい。提言を発信することで、センターの存在価値が高まる。さらに提言実現に向け、各方面に働きかけを展開していく。こうした活動を通じて、よりよい日本の未来を築いていく一端を担っていければと思う。

２．さまざまな地域での「自啓共創塾」開催支援

卒塾生それぞれがつながり、各自のテーマを実践し、行動することを支援し合えるようなサポートを行いたい。さらに、それぞれの地域や職場での「自啓共創塾」開催を支援することで「日本のこころ」の全国普及を図りたい。

３．身体知ワークショップ開催

日本のこころの本質を掴むのは、知識や観念ではなく覚知。五感塾以外に身心一如のワークも開催していきたい。伴走者として塾生のみなさんと共に学ぶ機会を持たせていただきましたが、皆さんからの鋭い意見や深い洞察から、私も触発され、得難い経験を持つことができました。8カ月間、どうも有難うございました。

松本　亮太

日本のこころを学ぶ自啓共創塾には事務局のメンバーとして参加させて頂きました。日本のこころについてこれだけ大勢の方が対話する場は他に経験がなく刺激的でした。私自身、日本のこころの源流は何かと考えるとき、四季あり豊かな自然に囲まれた生命多様性ホットスポット日本であると同時に、地震、火山、台風や津波など厳しい自然に向き合い畏怖してきたことが原点ではないかと感じています。和辻哲郎は『風土』のなかで、環境（風土）が人間存在に大きく影響することを論じています。西洋合理主義が限界と指摘される現在、西洋の自然征服型と異なる自然調和型の日本のこころには、世界に向けた強いメッセージ性があり、日本のこころを積極的に発信すべきときであると感じています。今後は、世界の人々との対話により、日本のこころの再発見と共創につながる機会があることを期待しています。

柏木満美

５月から始まった自啓共創塾の第一期が、ついに終わろうとしている。私が関わり始めたのは２月から。別件でご縁をいただいていた根本さんから、塾のあらましと事務局を手伝ってもらえないかとのお声がけを頂いたのがきっかけだった。そこから、副教材の編集手伝い、塾生の募集・応募受付対応が始まり、５月のオリエンテーション、開塾と、一気に進んできた感がある。

事務局として関わってきて、つくづく凄いことだなぁと感じるのは、塾も運営のためのミーティングも、全てオンラインでやって来たことだ。私は、塾生の方はもとより、根本さん以外、運営に関わるすべての方とこれまで一度も直接お会いしたことがない。しかし、11か月経ってみると、自分のなかに確かに「仲間」意識があるし、多少の不安定さはありながらもチームワークを感じる。人との関わり、交わりの新しい形をこの約一年で体験させてもらった気がしている。

塾のテーマである「世界のための日本のこころ」は、最初あまりにも漠然としていて、多くの塾生は戸惑われているようだった。副教材に書かれていることや話題提供者の話から自分が感じた事、考えた事を自由に話し合ってみてくださいと言われても……、大まかなテーマがあるだけで目的や帰結点がない話し合いは、どう進めていいのかわからない、進行のリードを取るべきか、まずはグループの皆の出方を伺おうか……、一人一人の個性やこれまでの経験からくる思考や行動パターンがそこにはあったように思う。

それでも、回を重ね、日本の歴史や人物、思想、文化にふれ、参加者同士の考えにふれるうちに、日本のこ

ころってこういう感じ？というものが朧げに場の中に現れだし、発言やチャット、事前メモ、終了後の振り返りには、それぞれの方が自分事としてどう捉え、考えたかという視点のものが目立つようになってきた。

以前、古事記を学んだときに、日本の神様たちは何か困った事があった時、天の安の河原に集まって皆で話し合いをしてきたと学んだ。それは、誰（何）がいいとか悪いとかではなく、全体にとって善い方向になるための話し合いで、神様たちにも優劣や順位があるのではなくそれぞれに役割があり、それを果たすよう努めているのが私たち日本人の祖先の姿であると。

今回、一伴走者として携わってきた期間を振り返って思うのは、大いなる「天の安の河原」に塾生も運営スタッフも皆同じように集って、河のきらめきを感じ合い、掬いあげた感じを伝え合いながら、各々が自分の役割を思い出し、思いを新たにしたのではないかということ。第一期は終了となるが、これからも各々が持ち場持ち場で自分の本当の役割を果たし、そのための努力を厭わない人物であってほしい（誰よりも自分自身がそうありたいと思っています）。そして自啓共創塾にはこの志を持った者がいつでも集える場であってほしいと思う。

11 か月、大変お世話になりありがとうございました。至らぬ点も多くご迷惑もお掛けしましたが、引き続き、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

土居　征夫

塾生の皆さんの意見から、多くの気付きと学びを頂きました。

人間のこころには、人類全体が共有する普遍的要素と、民族や文化に固有の要素があると思います。こころには人類に共通するものとして、**小我**（自己保存本能をベースとするもの、独立自尊という素晴らしいものもある一方で、他を押しのける過剰な貪欲・強欲も発現する）と**大我**（真善美を理解する）の両方が存在します。日本のこころには、これに縄文時代以来の長い歴史を経て形成されてきた固有の性向が付加されていると思われます。

日本のこころは、独特の自然・風土と長い歴史の中で育まれてきたもので、大我の発露の面では多くの美点があると確信できますが、小我の面では、専門分野や地域ごとに形成される所属集団内の価値（利害）が極端に優先され、その結果、往々にして世界や社会を見渡す統合知（例えば国家社会や地球大の視点）に欠けることがあるように思います。

内向きの価値に閉じこもり世界や社会全体の価値を見失う事態を、私達は昭和の戦争の時代に経験し、また戦後の失われた 20 年と昨今の社会の沈滞や国力の低下に感じられるように思います。

この時代をのり越えるには、若い世代を中心に、日本のこころの源流の再認識がすすみ、過去の歴史（時間）と現在の大地（空間）にしっかりと足を据え、一方では、日々現実に起きる事態に対応する徹底したリアリズム（現実主義）と地球大の視点で理想を追求するアイデアリズム（理想主義）の間での「こころの均衡」を失うことのない、真の自信とともに生きぬく覚悟をもった人達が、津々浦々から輩出されることが求められます。

現在の世界が直面する地球環境や生命倫理の問題、科学技術の異常な進展、諸格差の拡大、対立の激化と戦争の危機という厳しい現実を考えると、事は急がざるを得ません。

全国の教育、産業、地域における学びの現場で、自啓共創塾のような学習システムと考え方が広く理解され、頭の柔軟な若い世代から日本と世界を支える多くの人材が大量に育つ環境が早急に整備されることをこころから念願します。